甲府市文化財調査報告 17

武田城下町遺跡 I

— 大手一丁目（甲府営林署跡地）発掘調査報告書 —

2001

中央都市建設株式会社
甲府市教育委員会

序

甲府市は今から481年前に、甲斐守護職の武田信虎が躑躅ケ崎の地に新たな館を造営し、その周辺に家臣や商職人を集めて城下町を開創したことに始まります。信虎の名づけた「甲府」の地名は甲斐の府中（都）を意味するもので、文字通り領国統治の拠点となりました。

以来、甲府のまちは武田氏の勢力拡大に伴って整備が続けられ、続く信玄・勝頼の時代には東国でも有数の規模の城下町に発展したといわれています。また、武田氏滅亡後は甲府城を中心として近世都市甲府が建設され、今日に至る繁栄の礎が築かれました。

城下町としてのこの長い歴史に彩られた甲府のまちには、全国に誇り得る多彩な文化遺産が残されていましたが、戦災とその後の急速な都市化の進展のため、この地に培われてきた風情や伝統文化の多くが失われようとしています。

甲府市教育委員会ではこうした状況に対処し、市民生活と文化財保護の調和を図るべく、甲府城下町に関わる文化財・地名・風俗などの総合的な調査を進めるとともに、地下に眠る城下町遺跡の保護にも取り組んでいるところでございます。

この度は、旧甲府営林署跡地の宅地造成に先立って発掘調査を実施しましたところ、武田氏の時代をはじめとする建物や水路の跡などたくさんの遺構・遺物を検出し、土地に刻まれた歴史の一端をこの報告書に記録・保存することができました。出土遺物の中には金属を溶かした痕跡をもつ土器や焼土、鉄砲玉などもあり、家臣屋敷地の一角で鍛冶に関係した作業が行われていたことが明らかとなるなど、予想以上の成果となりました。

調査の実施にあたりまして特段の御理解と御配慮をいただきました中央都市建設株式会社、並びに関係者各位に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きの御力添えを御願い申し上げます。

平成13年３月

甲府市教育委員会
教育長　金　丸　　晃

例　　言

1．本書は国史跡武田氏館跡（山梨県甲府市古府中町・屋形三丁目・大手三丁目）の周辺に広がる武田城下町遺跡のうち、甲府営林署跡地（大手一丁目4539—1番地）の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は宅地造成に伴うものであり、中央都市建設株式会社（代表取締役藤澤進）からの委託を受け、甲府市教育委員会が主体となって実施した。
3．調査経費は、事前の試掘調査を甲府市教育委員会が、本調査を中央都市建設株式会社が負担した。
4．調査は志村憲一（甲府市教育委員会文化財主事）及び山﨑雅恵（富山大学人文科学研究科修了）が担当した。
5．本書の編集・執筆は、市瀬文彬文化芸術課長を責任者とし、数野雅彦文化財係長、志村憲一・伊藤正彦・平塚洋一文化財主事、望月小枝（駒沢大学卒業）、山﨑雅恵が行った。
6．本書の挿図は、望月小枝・山﨑雅恵・伊藤正彦が作成した。
7．本書に関わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。
8．発掘調査及び報告書作成に際し、次の方々から御指導・御協力をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。
　伊藤正義、小野正敏、小林健二、萩原三雄、笹本正治、高野玄明、畑　大介、
　八巻与志夫、山梨森林管理事務所

凡　　例

1．遺構番号は、今回の報告に際し、付け直した。
2．遺構図・遺物実測図の縮尺は、各図面に表示した。
3．遺構断面図の水平数値は海抜高度を示し、単位はmである。
4．報告書中の方位は、すべて磁北を示している。
5．挿入の地図は、国土地理院発行の５万分の１甲府（平成３年発行）を使用した。

［調査参加者］
　荒木昭彦　飯室久美恵　小澤四郎　金井いく代　川口格一　岸本美苗　北原洋子
　栗田宏一　佐田金子　佐田　昇　鈴木正文　高添美智子　武井美知子　塚原澄子
　花曲敬子　本道歌子　本道政清　望月貴美子　望月宏美　渡辺　茂

目　　次

序
例言・凡例
目　　次

第1章　調査の経緯と概要

第1節　調査に至る経緯……1
第2節　発掘調査の概要……1

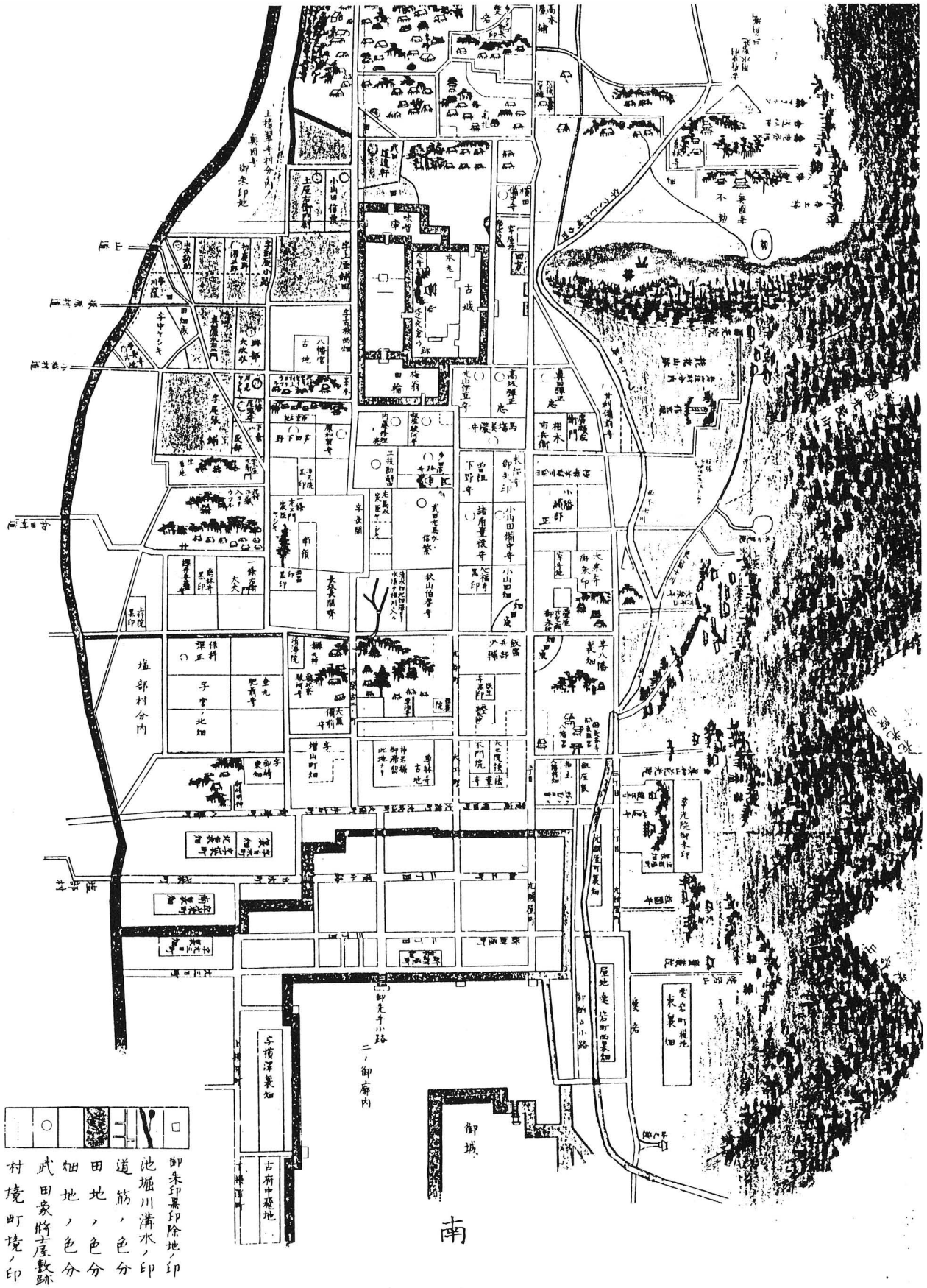
第2章　遺跡の環境……2

第3章　遺構と遺物

第1節　層　　序……4
第2節　遺　　構
1　住居跡……4
2　土　　壙……4
3　ピット……6
4　溝　　……6
5　集石土壙……22
6　暗　　渠……22
7　掘立柱建物……24
第3節　遺　　物……24

第4章　ま　と　め

第1節　検出遺構の変遷……35
第2節　武田城下町遺跡営林署跡地点の再葬墓について……36



古城
塩部村分内
御城
南
御朱印黒印除地ノ印
池堀川溝水ノ印
道筋ノ色分
田地ノ色分
畑地ノ色分
武田象將屋敷跡
村境町境ノ印

『甲府略志』所収「古府之図」

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

山梨県甲府市大手一丁目4539―1における今回の発掘調査は、中央都市建設株式会社の宅地造成工事に伴って実施された。当該地区は相川扇状地上の武田氏館跡を中心とした武田城下町の範囲内にあたり、字「小山田」の地名が残り16世紀代には武田氏の家臣屋敷が存在していたと推定される土地である。

調査区は平成11年３月まで甲府営林署の敷地であり、営林署の移転に伴い民間に払い下げになることが決定された。払い下げに先立ち、甲府営林署の依頼で甲府市教育委員会が試掘調査を行い、遺構の残存状況の確認を行った。試掘調査は平成12年１月11日より２月16日まで実施し、中世から近世にかけての土壙・溝・ピットなどの遺構を検出した。この結果に基づき甲府市教育委員会と、宅地開発を行う中央都市建設株式会社の両者で協議を行い、造成工事により遺構面が破壊される部分について本調査を実施することが決定され、発掘調査及び整理作業についての契約が結ばれた。

本調査は平成12年４月24日から同年７月14日まで作業を実施し、引き続き整理作業と報告書の編集を行った。

第２節　発掘調査の概要

発掘調査に先立って行われた試掘調査では、調査区（2638.80㎡）全域に幅２ｍで東西方向１本、南北方向５本のトレンチと、２ｍ四方のグリッド２か所を設定した。重機で表土の除去を行い、さらに人力により遺構、遺物の確認作業を行った。

本調査の対象となったのは、道路敷設により遺構面が破壊される部分（約430㎡）で、幅７～８ｍ、東西約70ｍの区域である。重機により表土を除去した後、南北をＡ～Ｅ、東西を１～18に分割し、合計58のグリッド（４×４ｍ）を設定した。発掘調査段階では、調査区の形にあわせて任意にグリッド杭を設定している。２点のグリッド座標を以下に示しておく。

Ｂ8グリッド　ｘ＝－30982.625　ｙ＝6988.594　ｚ＝309.228
Ｃ8グリッド　ｘ＝－35978.778　ｙ＝6989.691　ｚ＝309.424

基本的に遺物は、遺構又はグリッドごとに取り上げを行っている。出土した金属・漆器製品の一部については、財団法人帝京大学山梨文化財研究所で保存処理を行った。航空写真測量による全体図の作成を行い、発掘調査作業を終了した。

本調査により検出された遺構は、地表下0.3～１ｍで確認されている。住居跡１棟、土壙６基、溝20条、集石土壙１基、暗渠５条、掘立柱建物跡１棟、ピット103基など平安時代から近代にかけての遺構である。検出された溝に関しては、現在の地割線と平行若しくは直交するものが多く、中世16世紀代から現代にかけての土地利用の変遷を物語る。さらに屋敷境の堀と考えられる溝の検出は、今後、武田氏の時代の家臣屋敷地の構造を研究する上で貴重な資料を提示するものである。

遺物は相川扇状地上では発見例が少い、平安時代の甲斐型土器片が比較的多く検出された。中世遺物は全体の４～５割を占める。かわらけ、常滑焼甕、瀬戸美濃系の天目茶碗・

丸皿・擂鉢などの陶器、中国製の磁器、鉛製鉄砲玉、銅銭等主に16世紀代の武田氏の時代のものであり、居住者が武士階層であったことを推定させる遺物である。　（志村憲一）

第２章　遺跡の環境

今回、宅地造成工事に伴って発掘調査が実施された甲府営林署跡地は、相川扇状地扇央部の標高310ｍの辺りに所在する。この扇状地の一帯には、武田信虎の府中移転に際し、永正16年（1519）から甲斐の新府中「甲府」が建設・整備され、続く信玄・勝頼の時代にかけて武田氏領国における政治・経済・文化の中心都市として発展した。

城下町の中核となったのは新たに造営された武田氏の居館「躑躅ケ崎館」で、調査地点から約800ｍ北側に位置する。この館の周辺から現在のＪＲ中央線辺りまで広がっていた戦国期の甲府城下町には、５本の南北基幹街路が２町間隔で計画的に整備されており、中央の街路は館主郭部の中心線を機軸として設定されたものと推定されている。

中央街路の南半沿線は戦国期の史料にその名称を確認できる「柳小路」「連雀小路」が南北に連なり、商人町を形成していた。北半沿線は、高野山成慶院所蔵の「武田家日杯帳」に見える「広小路」に比定する説が飯沼賢治氏によって提示されている。「武田家日杯帳」には、広小路及び広小路横宿の住人として跡部美作守殿ムスメ・山縣甚太郎昌次・中サワ道存・秋山万落内方に加えて京饅頭屋森村忠右衛門の名も記されており、武士を主体とする屋敷地区でありながら富裕商人と推定される人物も居住していた様子がうかがわれる。

調査場所は中央街路に東接した字小山田地内で、市内上石田を本貫地とした小山田備中守昌辰の屋敷跡と伝承されているが、確証を欠く。武田神社所蔵の「貞享三年御直図」（『史跡武田氏館跡Ⅶ』所収）では、中央街路に沿って小山田備中守屋敷跡、その東側に諸角備後守屋敷跡を描いており、『甲府略志』所収の「古府之図」では両屋敷跡の位置が逆となっている（巻頭口絵）。両絵図ともに調査区南側に心福寺黒印地、北側に曽根下野守屋敷跡を記す点は同じであるが、中央街路西側は前者が大神宮・山形河内守屋敷跡・内藤相模守屋敷跡であるのに対し、後者は武田左馬介信繁屋敷跡であり、近世に描かれた城下町絵図の信憑性の検証が今後の課題となる。

武田氏が整備した城下町は天正10年（1582）の武田氏滅亡後も存続し、甲府城建設に伴う城下町の移転・再整備に伴って武家屋敷の一帯が空き地となり、周辺地域の農民を移して古府中村が編成された。地名「古府中」の初見が慶長元年（1596）であり、多くの寺社が文禄年間の新城下町移転を伝えていることから、古府中村が成立し一帯の耕地化が進められたのは文禄年間のことであろう。慶長16年「古府中再縄水帳」（山梨県立図書館所蔵）では、相川扇状地の開析部から扇央部にかけて田畑が広がる状況を見てとることができる。

近代になり調査区の南西及び南側には、山梨県師範学校（明治44年開校）と山梨高等工業学校（大正13年開校）が建設されたが、調査場所から武田氏館跡（武田神社）にかけては水田一色であり、宅地化が急速に進むのは戦後である。この場所に甲府営林署が建設されたのは、昭和25年12月のことである。　（数野雅彦）

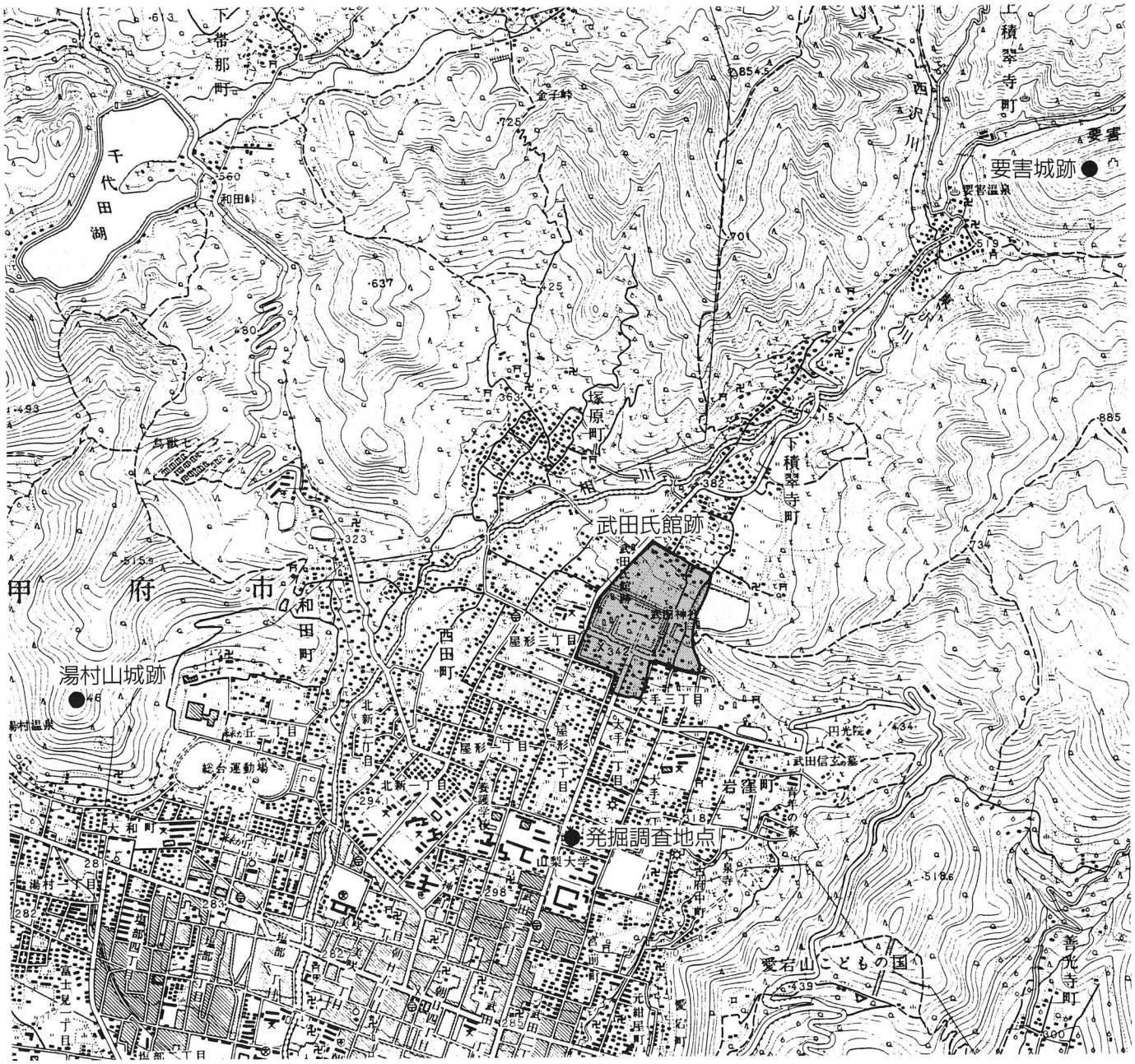


図1　遺跡位置図（1:25,000）

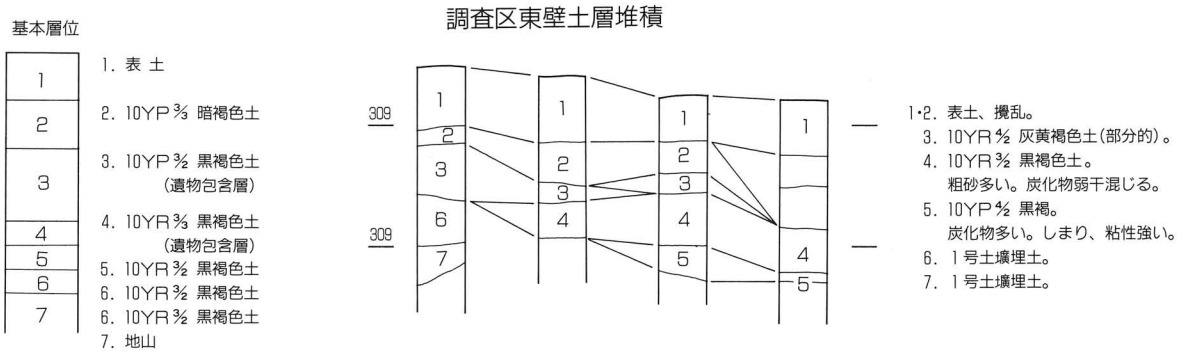


図2　土層柱状図

第３章　遺構と遺物

第１節　層序（図２）

本遺跡は、緩やかに傾斜した相川扇状地に立地する。甲府営林署跡地にあたり、遺跡全体上面は、かなりの削平を受けている。調査区の北側では、表土・耕作土である１層及び２層直下に遺構確認面である地山を確認できる。２層は水田の床土であり、調査区の南東側にやや厚く確認できるが、表土攪乱のため、一定したレベルにない。３層及び４層は遺物包含層であり、中世から近世、近代にかけての遺物を含んでいるが、均質に堆積したものではなく、調査区の北西側では明確に確認していない。５層及び６層は調査区のほぼ中央に確認できる土層である。主な遺構確認面である地山は中程度の礫を多く含む黄褐色土層で凸凹に堆積しており、部分的に礫を含まない地山（調査区東側で確認できる黒褐色土でチップ状の黒色土が混じる）上でも遺構を確認している。

調査区の土層は基本的に、南東に向かって緩やかに傾斜しているが、部分的に耕作による人為的な削平と盛土によってある程度平坦に造成されている。（山﨑雅恵）

第２節　遺構

１　住居跡（図３・写真２～３）

１号住居跡は、調査区の西側、Ｂ13・14、Ｃ13・14グリッドに位置し、ピット48・49・50と重複する。形状は、隅丸方形を呈するものと思われるが、中世以降に整地作業が行われたため、詳細は不明である。規模は長軸3.2ｍ、短軸2.5ｍ、確認面から床面までの深さ８cmを測る。床面は、黒色粘土を主体的に用いた面が確認されたが、硬化面については確認されていない。壁溝及び柱穴は、検出されなかった。

住居跡の中央から西壁に設けられた煙道状石組まで、約1ｍの幅で焼土が堆積する。そのため、カマドは西壁中央に設置されたと推定される。

出土遺物は総数70点。うち土師器が68点（坏系60点・甕系８点）、須恵器が２点である。このうち図示できた遺物は２点（図17―１・２）である。９世紀第３～４四半期頃（甲斐型土器編年第IX～Ｘ期）の所産と考えられる。（平塚洋一）

２　土　　壙

１号土壙（図４）

Ｄ18、Ｅ18グリッドで検出された。一部が調査区東北端の壁にかかる。南北に細長い形状であり溝状を呈するが、土壙として扱っておく。検出部は長さ294cm、最大幅32cmを測る。土壙底部北半には主軸を同じくした長さ139cm、最大幅21cmの落ち込みがあるが、時期差は認められない。落ち込み部の深さは25cmを測る。径22cmのピット11を切る。遺物は、近世以降の所産と推定される陶器の細片が１点出土した。

２号土壙（図４）

Ｃ18グリッドで確認された。グリッド南壁にかかるため全体を検出し得なかったが、径約70cm、深さ19cmの円形土壙と推定される。覆土は単一土層で、西側をピット６に切られ

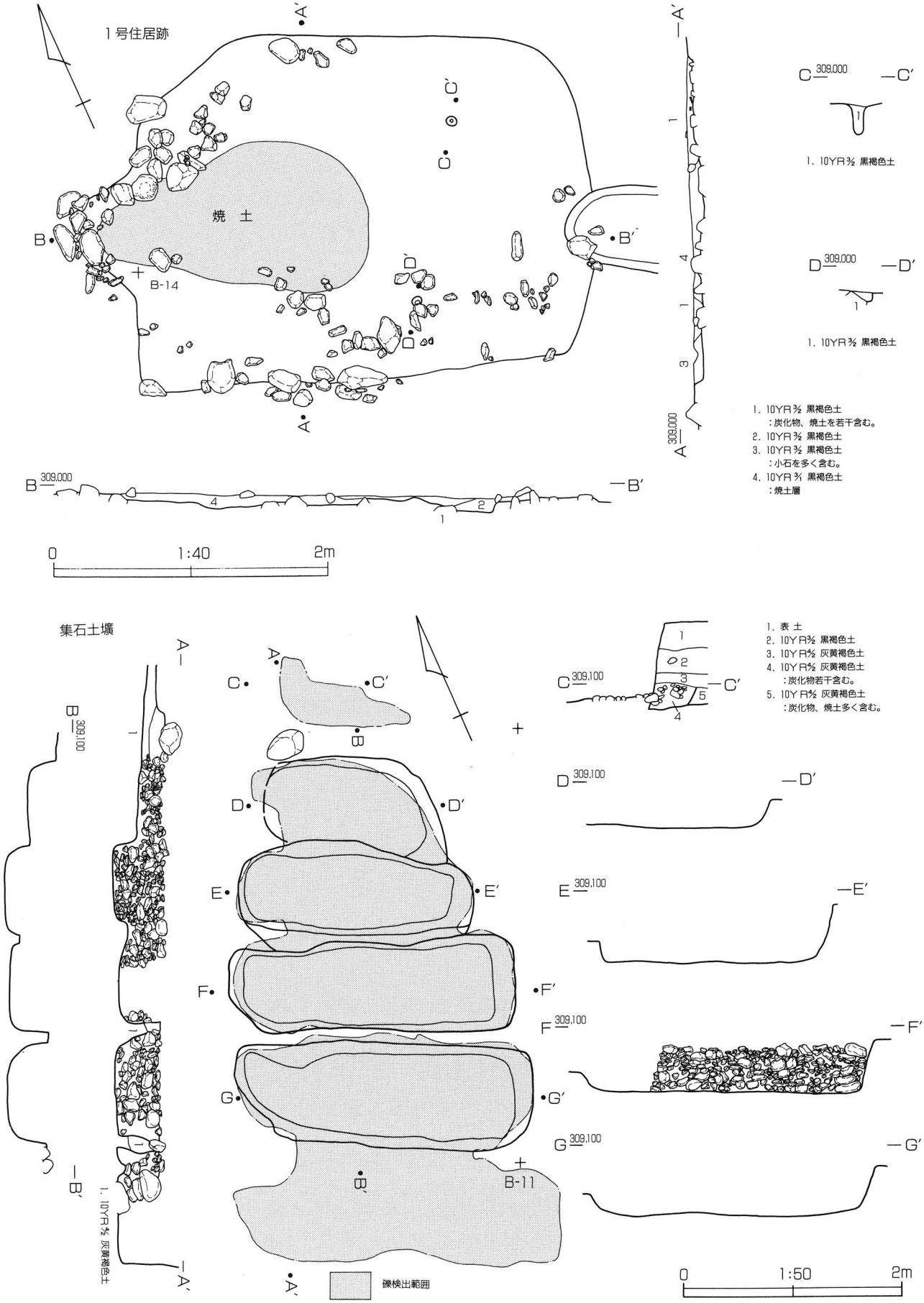


図３　1号住居跡・集石土壙実測図

る。遺物は検出されなかった。

3号土壙（図4）

B15グリッドで検出された。径125cm、深さ15cm程度の円形を呈した浅い土壙である。東端は比較的新しい時期に南北に構築された1号暗渠に削られ、中央上面は東西に主軸をもつ5号溝によって切られる。南端は4号溝を切る。出土遺物はない。

4号土壙（図4）

B16グリッドで6号溝に接して検出された。平面は不整楕円形で、長径71cm、短径56cmを測る。深さ16cmと浅く、断面は盆状を呈する。覆土は3層に分けられ、ほぼ水平に堆積する。底部から側面にかけ、地山層内の礫石の突出が目立つ。出土遺物はない。

5号土壙（図4）

B11グリッドで検出された。12号溝と13号溝の間に位置する。長径213cm、短径195cmの円形を呈した比較的大きな土壙であるが、深さは15cmで、底面からの立ち上がりもなだらかである。土壙中央部は、南北方向に幅約50cmの攪乱を受けている。覆土は2層に分かれ、上層には炭化物・焼土が多く含まれる。底面には地山の小礫が多数露出する。図示した出土遺物はかわらけ1点のみ（図17—3）であるが、他に火鉢脚部と肥前系磁器の細片が少量検出された。

6号土壙（図4・写真4～6）

B3グリッドで検出された。内部に人骨を埋葬する。形状は南北に主軸をもった長楕円形で、南北100cm、東西60cm、深さ24cmを計測する。底面は比較的に平坦であるが、東側に向かって若干の傾斜をもつ。土壙北側に頭骨を東向きに寝かせて置き、その南側に四肢骨を方向を揃えて並べ、上部に長さ約40cmの安山岩を乗せていた。頭骨頸部付近の上面に開元通宝・他の銭貨6枚が副葬されており、中世の再葬墓と考えられる。長さ約7cmの角釘1本が銭貨の近くから出土した（図17—4～6）。

頭骨を取りあげた段階で、その直下からピット86が検出されたが、6号土壙に伴う遺構であるか確認できなかった。土壙西側は、ピット65に切られている。（数野雅彦）

3　ピット（写真7）

本遺跡検出のピットは総数104基である。覆土中から遺物を出土したものは僅かであり、構造や時代性は明らかでない。

そのため、別表に平面形態・規模・土層・切合い関係をまとめた。（平塚洋一）

4　溝

1号溝（図6・写真8）

B14・15・16・17グリッドにかけて検出したN—18°—Wの溝である。

検出長は約6.8m、幅は最大で69cm、深さは約9cmを測る。1号暗渠に切られ、2号溝を切る。北西側は、途中B14付近で確認できなくなるが、南東側に深く、調査区外へ続いている。

遺物は、かわらけ1点（図17—11）を図示している。この他土師質土器の小片数点を確

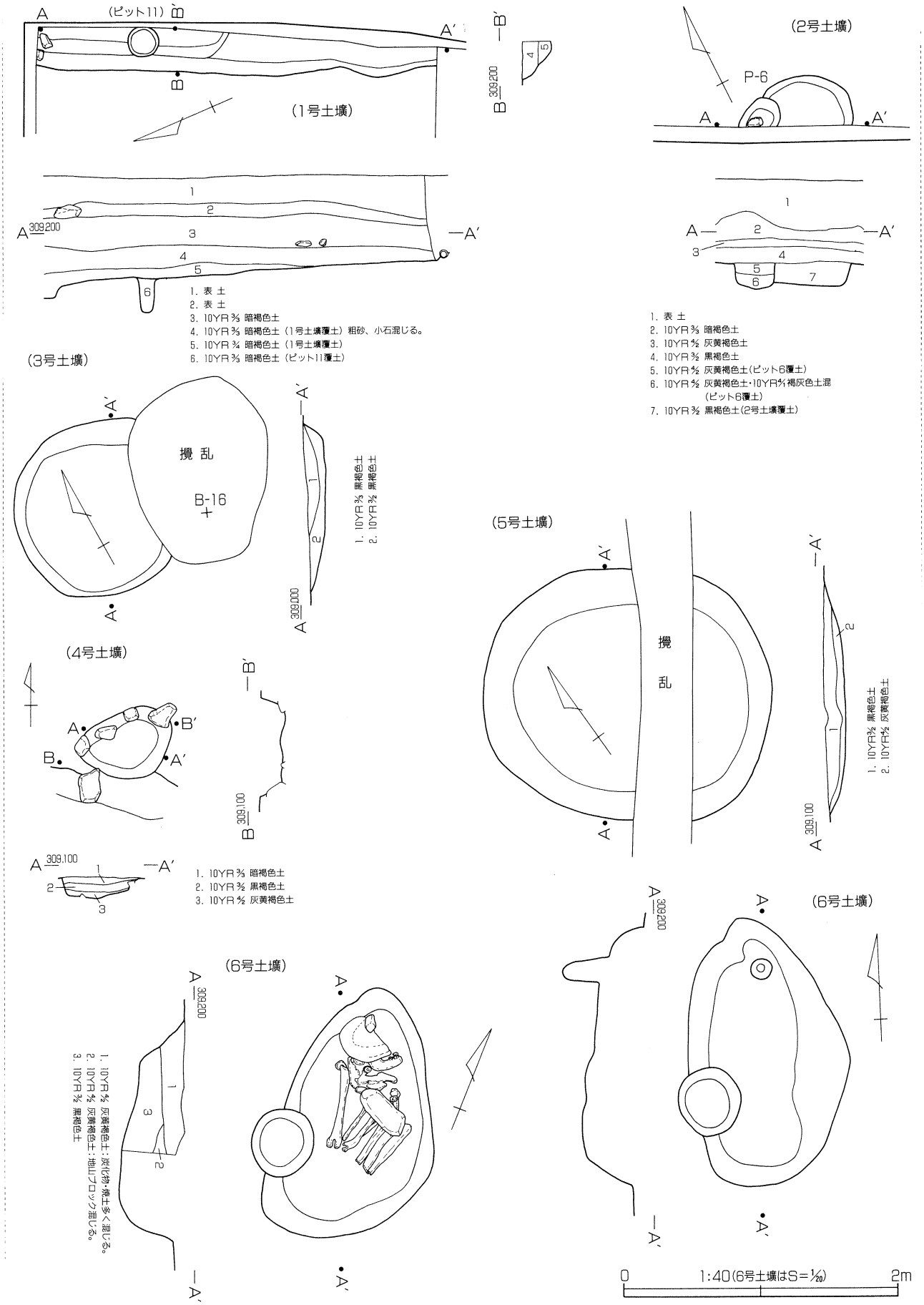


図4　1号～6号・土壌実測図

武田城下町（営林署）遺跡　Pit 計測表

遺構番号	平面形態	長径	短径	深さ	土　　層	出土遺物	番号	備　　考
Pit 1	円形	24	21	19	1層10YR暗褐3/3 2層10YR黒褐3/2			
Pit 2	円形	21	19	5	1層2.5Y黒褐3/1 2層10YR暗褐3/3 3層10YR暗褐3/3			
Pit 3	円形	22	20	6	1層10YR暗褐4/4			
Pit 4	円形	17	16	8	1層10YR暗褐3/3			
Pit 5	円形	21	18	12	1層10YR暗褐3/3			
Pit 6	楕円形	23	24	19	1層10YR灰黄褐4/2 2層1層＋10YR褐灰4/1			2号土壙を切る
Pit 7	略円形	40	36	26	1層10YR暗褐3/3 2層10YR暗褐3/3			Pit16,18を切る
Pit 8	略円形	30	27	30	1層10YR黒褐3/2 2層10YR暗褐3/4			
Pit 9	円形	14	13	26	1層暗褐3/2	甲斐型甕1		
Pit10	円形	30	38	25	1層10YR黒褐3/3 2層10YR暗褐3/3	甲斐型坏1		
Pit11	円形	22	—	24	1層10YR暗褐3/3 2層2.5Y黒褐3/2			1号土壙に切られる
Pit12	円形	35	34	18	1層10YR黒褐3/2 2層10YR黒褐3/2			
Pit13	円形	46	32	9	1層10YR暗褐3/3 2層10YR灰黄褐4/2			
Pit14	不整形	63	44	15	1層10YR暗褐3/3 2層10YR暗褐3/3			2号溝を切る
Pit15	円形	15	15	12	1層10YR黒褐3/2 2層10YR暗褐3/3			
Pit16	略円形	22	26	26	1層10YR暗褐3/3 2層10YR暗褐3/3			Pit 7 に切られる。Pit18を切る。
Pit17	楕円形	26	22	9	1層10YR暗褐3/3			1号溝を切る
Pit18	不整形	34	26	45	1層10YR黒褐3/2 2層10YR黒褐3/2			Pit 7 ,16に切られる
Pit19	円形	32	22	16	1層10YR黒褐3/2			
Pit20	円形	24	—	12	1層10YR黒褐3/2	甲斐型坏片2		Pit24を切る
Pit21	略円形	28	26	12	1層10YR黒褐3/2			
Pit22	略円形	40	37	10	1層10YR黒褐3/2			
Pit23	円形	24	—	8	1層10YR黒褐3/2			1号溝に切られる
Pit24	円形	22	12	8	1層10YR黒褐3/2			Pit20に切られる
Pit25	楕円形	16	13	6	1層10YR黒褐3/2	土師質土器片4		5号溝に切られる
Pit26	略円形	30	26	4	1層10YR黒褐3/2			
Pit27	楕円形	38	31	12	1層10YR黒褐3/2			
Pit28	不整形	41	28	6	1層10YR黒褐3/2	かわらけ1	図17-7	
Pit29	不整円形	37	31	8	1層10YR黒褐3/2			14号溝を切る
Pit30	略円形	18	13	6	エレベのみ			
Pit31	円形	13	—	9	エレベのみ			
Pit32	楕円形	31	24	9	1層10YR黒褐3/2			
Pit33	略円形	32	27	15	1層10YR暗褐3/3			14号溝を切る
Pit34	楕円形	31	23	22	1層10YR暗褐3/3 2層10YR灰黄褐4/2 3層10YR黒褐3/2			
Pit35	楕円形	27	18	12	1層10YR暗褐3/3			
Pit36	楕円形	70	61	11	1層10YR黒褐3/2	かわらけ片1	図17-8	
Pit37	略円形	50	47	13	1層10YR黒褐3/2 2層10YR暗褐3/3	土師質土器片2	図17-9	
Pit38	略円形	53	47	12	1層10YR暗褐3/3			
Pit39	円形	24	—	17	1層10YR黒褐3/1 2層10YR黒褐3/2			
Pit40	略円形	35	30	12	1層10YR黒褐3/2			
Pit41	略円形	42	31	28	1層10YR黒褐3/2 2層10YR暗褐3/3			
Pit42	略円形	44	38	30	1層10YR暗褐3/3 2層10YR黒褐3/2 3層10YR黒褐3/2			
Pit43	楕円形	44	36	12	1層10YR黒褐3/2			
Pit44	略円形	30	27	15	1層10YR黒褐3/2			
Pit45	略円形	19	16	28	エレベのみ			6号溝に切られる
Pit46	略円形	40	34	20	エレベのみ			
Pit47	円形	30	—	8	1層10YR黒褐3/2			
Pit48	円形	15	14	19	1層10YR黒褐3/2			1号住居と重複
Pit49	円形	13	—	6	エレベのみ			1号住居と重複
Pit50	円形	18	—	10	エレベのみ			
Pit51	略円形	28	26	12	1層10YR黒褐3/2			
Pit52	略円形	29	28	42	1層10YR灰黄褐4/2 2層10YR灰黄褐3/2			14号溝に切られる
Pit53	円形	23	—	14	1層10YR黒褐3/2			

遺構番号	平面形態	長径	短径	深さ	土　　層	出土遺物	番号	備　　考
Pit54	(円形)	22	13	26	エレベのみ			11号溝に切られる
Pit55	略円形	35	26	7	1層10YR黒褐3/2 2層10YR黒褐3/2			8号溝を切る
Pit56	略円形	36	23	11	1層10YR黒褐3/2			
Pit57	(円形)	46	26	10	1層10YR黒褐3/2			
Pit58	円形	24	21	25	1層10YR黒褐3/2 2層10YR黒褐3/2			
Pit59	円形	26	—	46	1層10YR暗褐3/3 2層10YR黒褐3/2			
Pit60	略円形	36	28	39	1層10YR黒褐3/2 2層10YR褐灰4/1			11号溝に切られる
Pit61	円形	16	15	17	エレベのみ			
Pit62	略円形	28	24	6	エレベのみ			
Pit63	略円形	26	26	4	1層10YR黒褐/2			
Pit64	略円形	26	25	26	エレベのみ			
Pit65	(円形)	25	24	13	1層10YR黒褐3/2			8号土壙に切られる
Pit66	(円形)	32	26	12	1層10YR暗褐3/3 2層10YR暗褐3/3	甲斐型坏片1		
Pit67	楕円形	34	27	5	エレベのみ			7号溝に切られる
Pit68	円形	26	24	10	1層10YR灰黄褐4/2			Pit84を切る
Pit69	楕円形	30	24	29	1層10YR灰黄褐4/2			
Pit70	略円形	26	22	23	1層10YR黒褐3/2 2層10YR黒褐3/2			
Pit71	円形	28	—	14	1層10YR灰黄褐4/2			
Pit72	(略円形)	59	34	42	1層10YR黒褐3/2 2層10YR黒褐3/2 3層10YR黒褐3/2 4層10YR黒褐3/1			
Pit73	略円形	28	—	7	1層10YR黒褐3/2			
Pit74	円形	42	—	34	1層10YR灰黄褐4/2 2層10YR灰黄褐4/2 3層10YR黒褐3/2			
Pit75	略円形	32	26	24	1層10YR黒褐3/2 2層10YR黒褐3/2			
Pit76	楕円形	30	24	15	1層10YR黒褐3/2			
Pit77	円形	10	—	10	エレベのみ			
Pit78	略円形	16	15	11	エレベのみ			7号溝に切られる
Pit79	略円形	28	25	24	1層10YR黒褐3/2 2層黒褐3/2			
Pit80	(略円形)	41	16	20	1層10YR黒褐3/2	鉛玉1	図17-10	
Pit81	不整形	33	23	38	1層10YR黒褐3/2 2層10YR黒褐3/2			
Pit82	略円形	29	23	16	1層10YR黒褐3/1 2層10YR黒褐3/1			
Pit83	楕円形	42	32	6	1層10YR黒褐3/2			7号溝に切られる
Pit84	(楕円形)	34	26	23	1層10YR灰黄褐4/2 2層10YR灰黄褐4/2 3層10YR黒褐3/2			Pit68に切られる
Pit85	円形	25	24	27	1層10YR黒褐3/2 2層10YR灰黄褐4/2 3層10YR黒褐3/2			
Pit86	円形	8	—	18	エレベのみ			8号土壙と重複
Pit87	略円形	14	10	6	エレベのみ			8号溝に切られる
Pit88	楕円形	46	35	7	1層10YR黒褐3/2			
Pit89	略円形	30	27	3	1層10YR褐灰4/1			
Pit90	不整楕円形	50	15	3	1層10YR暗褐3/3			
Pit91	略円形	20	18	6	エレベのみ			
Pit92	略円形	26	24	6	1層10YR灰黄褐4/2			
Pit93	楕円形	29	22	31	エレベのみ			
Pit94	円形	18	—	5	エレベのみ			
Pit95	(楕円形)	37	16	14	1層10YR黒褐3/2 2層10YR灰黄褐4/2			
Pit96	円形	26	24	6	1層10YR灰黄褐4/2			
Pit97	略円形	19	17	14	エレベのみ			
Pit98	略円形	18	14	19	エレベのみ			
Pit99	(楕円形)	32	18	44	1層10YR黒褐3/2 2層10YR黒褐3/2	焼土塊		Pit100に切られる
Pit100	円形	35	34	23	1層10YR黒褐3/2 2層10YR灰黄褐4/2 3層10YR灰黄褐4/2			Pit99を切る
Pit101	楕円形	37	32	3	1層10YR灰黄褐4/2			6号溝に切られる
Pit102	楕円形	20	15	5	1層10YR灰黄褐4/2			
Pit103	円形	16	—	8	1層10YR褐灰4/1 2層10YR灰黄褐4/2			

ている。
遺物、重複関係から、中世以降の溝と考えられる。

２号溝（図７）
Ｂ16・17、Ｃ17、Ｄ17グリッドにかけて検出したＮ―60°―Ｅの溝である。
検出長は約9.8ｍ、幅は最大で95cm、深さは約25cmを測る。１号溝、ピット14に切られる。溝は調査区北東側に続き、南西側は攪乱に切られ、確認できなかったが、南西側にも続いていたものとみられる。
遺物は、常滑の胴部破片（時期不明）１点と土師質土器の小片を確認している。
遺物、重複関係から、中世以降の溝と考えられる。

３号溝（図６・写真８）
Ｂ15・16グリッドにかけて検出したＮ―20°―Ｗの溝である。
検出長は約6.25ｍ、幅は約69cm、深さは約８cmを測る。２号溝を切る。溝は、１号溝とほぼ平行し、北西側は、途中Ｂ-15付近で確認できなくなり、南東側は、攪乱に切られているが１号溝と同じく、調査区外に続いていたものとみられる。
遺物は青磁１点（図17―12）を図示している。この他、土師質土器数点を確認している。
遺物、重複関係から中世以降の溝と考えられる。

４号溝（図８）
Ａ16・17グリッドにかけて検出した溝である。１号暗渠、19号溝、20号溝に切られる。溝は、強く屈曲しており、幅は最大で約45cm、深さ約19cmを測る。区画溝と考えられるが詳細は不明である。
遺物は、３点図示している（図17―13～15）。この他灰釉陶器の体部破片１点、土師質土器数点を確認している。いずれも小片である。
出土遺物の主体が平安時代の土器であることや、他の溝との重複関係から中世以前の溝ではないかと思われる。

５号溝（図６・写真８）
Ｂ14・15・16グリッドにかけて検出したＮ―20°―Ｗの溝である。
検出長は約6.27ｍ、幅は最大で76cm、深さは８cmを測る。ピット25、３号土壙、１号住居を切り、１号暗渠、４号土壙に切られている。１号溝、３号溝とほぼ平行し、南西側は１号住居と切り合う辺りで、南東側は攪乱に切られ、確認できなくなる。
遺物は、瀬戸美濃の小片１点、土師質土器若干を確認している。いずれも小片である。
遺物、遺構の重複関係から、中世以降の溝と考えられる。

６号溝（図８）
Ａ12、Ｂ12、Ｃ12グリッドで確認できる、南北方向の溝である。
溝は、Ｂ12付近で大きくクランク状に屈曲しており、幅は最大で約60cm、深さは約10cmを測る。ピット101・104、14号溝を切り、ピット96に切られる。北東側は調査区外に続いているものとみられるが、南西側は19号溝と重複しており、切り合い関係は不明である。
遺物は、土師質土器数点が出土しているが、小片であり、時期は不明である。

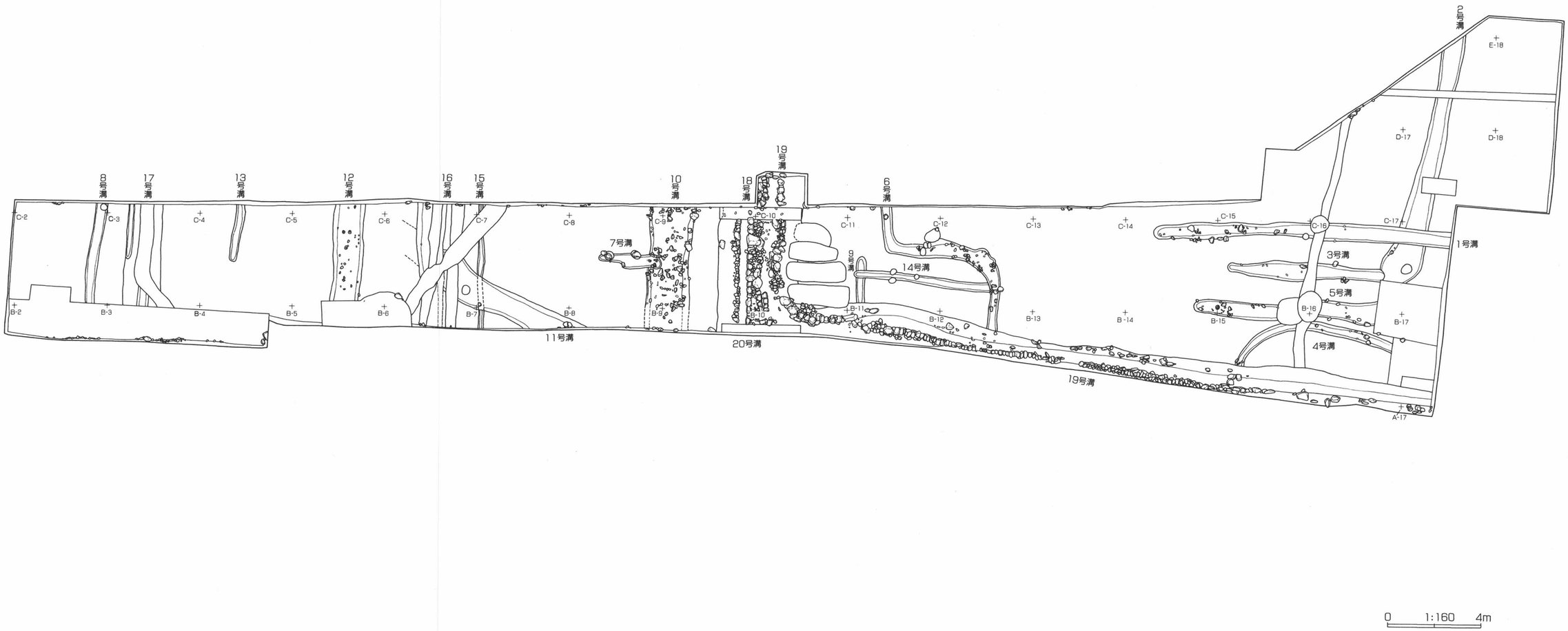

8号溝
17号溝
13号溝
12号溝
16号溝
15号溝
10号溝
18号溝
19号溝
6号溝
2号溝
7号溝
9号溝
14号溝
1号溝
3号溝
5号溝
4号溝
11号溝
20号溝
19号溝
C-2
C-3
C-4
C-5
C-6
C-7
C-8
C-9
C-10
C-11
C-12
C-13
C-14
C-15
C-16
C-17
D-17
D-18
E-18
A-17
B-2
B-3
B-4
B-5
B-6
B-7
B-8
B-9
B-10
B-11
B-12
B-13
B-14
B-15
B-16
B-17
0
1:160
4m

図5　溝位置図

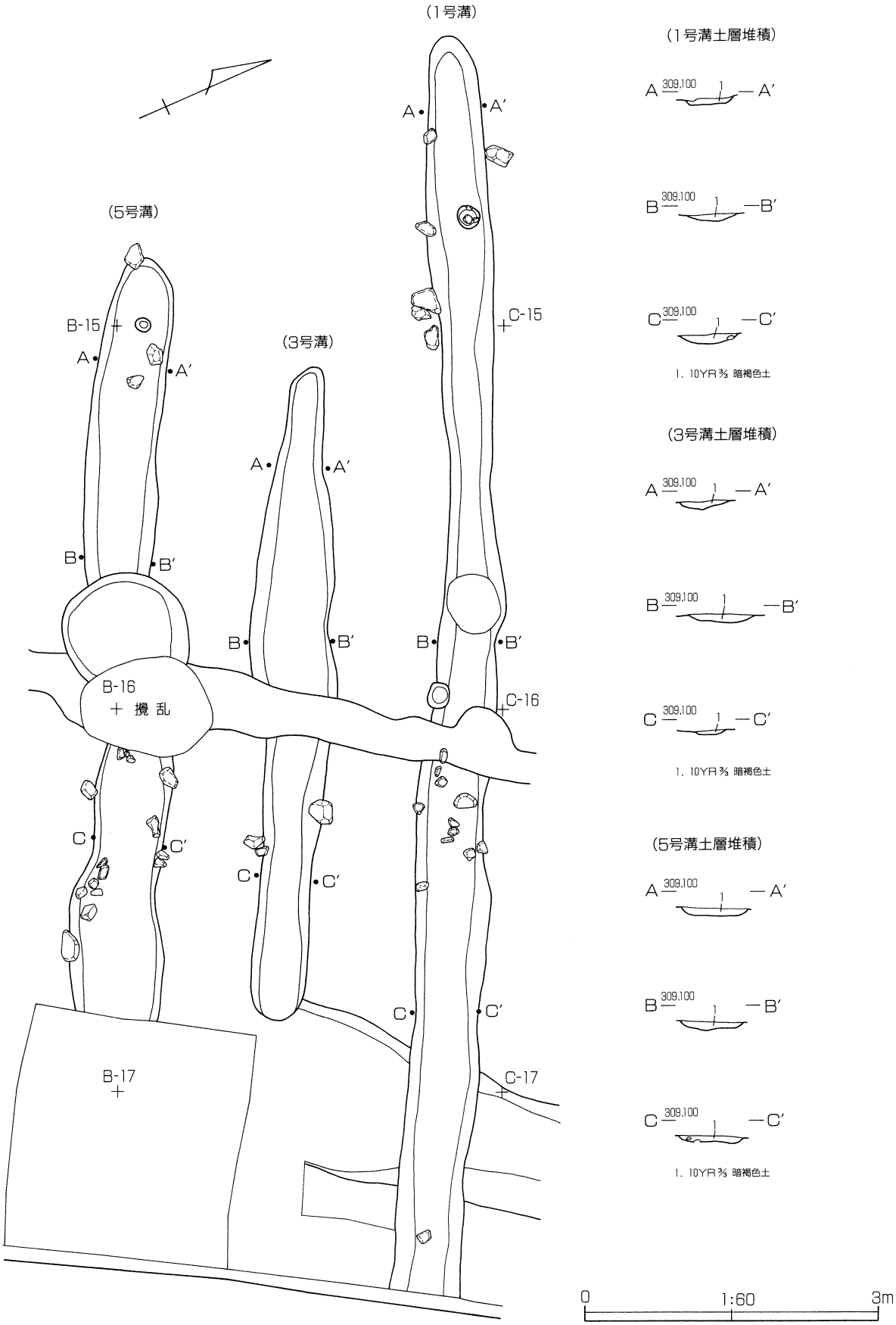


図6　1号・3号・5号溝実測図

7号溝（図9）

B8グリッドで確認したN—25°—Wの溝である。検出長は約2.66m、幅は最大で約66cm、深さは約4cmと浅い溝で、部分的に確認できたものである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

8号溝（図15）

B2グリッドで確認した、N—65°—Eの溝である。検出長は約4.35m、幅は最大で44cm、深さ約4cmと浅い溝である。北東側は調査区外に続いているものとみられるが、南西側は、攪乱に切られている。

遺物は、出土しておらず、時期は不明である。

9号溝（図9）

B11グリッドで確認した、N—65°—Eの溝である。

検出長は約1.92m、幅は約21cm、深さ約8cmと浅く短い溝である。14号溝に切られる。南西側は19号溝に切られ、延長を確認できない。

遺物は、出土しておらず、時期は不明である。

10号溝（図7）

A8・9、B8・9、C8・9グリッドで確認したN—70°—Eの溝である。

検出長は約5.27m、幅約1.76m、深さは約31cmを測る。溝は、北東方向・南東方向共に調査区外に続くものとみられる。

遺物は、2点図示している（図17—16・17）。この他、磁器、瀬戸美濃、瓦、擂鉢など土師質土器の小片が数点出土している。

遺物、他の溝との関係から中世の溝ではないかと思われる。

11号溝（図8）

A7・8、B6・7・8グリッドで確認したN—45°—Eの溝である。

検出長は5.74m、幅は最大で1.44m、深さは約11cmを測る。2号暗渠、3号暗渠、16号溝に切られる。溝は緩やかに屈曲し、北東方向、南北方向共に調査区外に続くものとみられる。

遺物は、瀬戸美濃系天目茶碗の小片1点が出土している。

遺物は少数であり、時期は不明である。

12号溝（図10・写真9～10）

B5、C5グリットで確認した、N—70°—Eの溝である。

検出長は約4.16m、幅は最大で1.4m、深さは27cmを測り、南西側に向かってやや深い。南西側は攪乱を受け、確認できないが、北東側は調査区外に続くものとみられる。

12号溝は覆土から多量の焼土塊と遺物を確認している。

遺物は、19点を図示している（図17—18～24、図18—25～35）。この他、瀬戸美濃系の施釉陶器数点と多くの土師質土器の小片、若干の鉄製品が出土している。

遺物に、大窯1～2段階の瀬戸美濃系施釉陶器が出土しており、時代を前後する遺物がほとんど確認できないことから、16世紀代に機能した溝と考えられる。

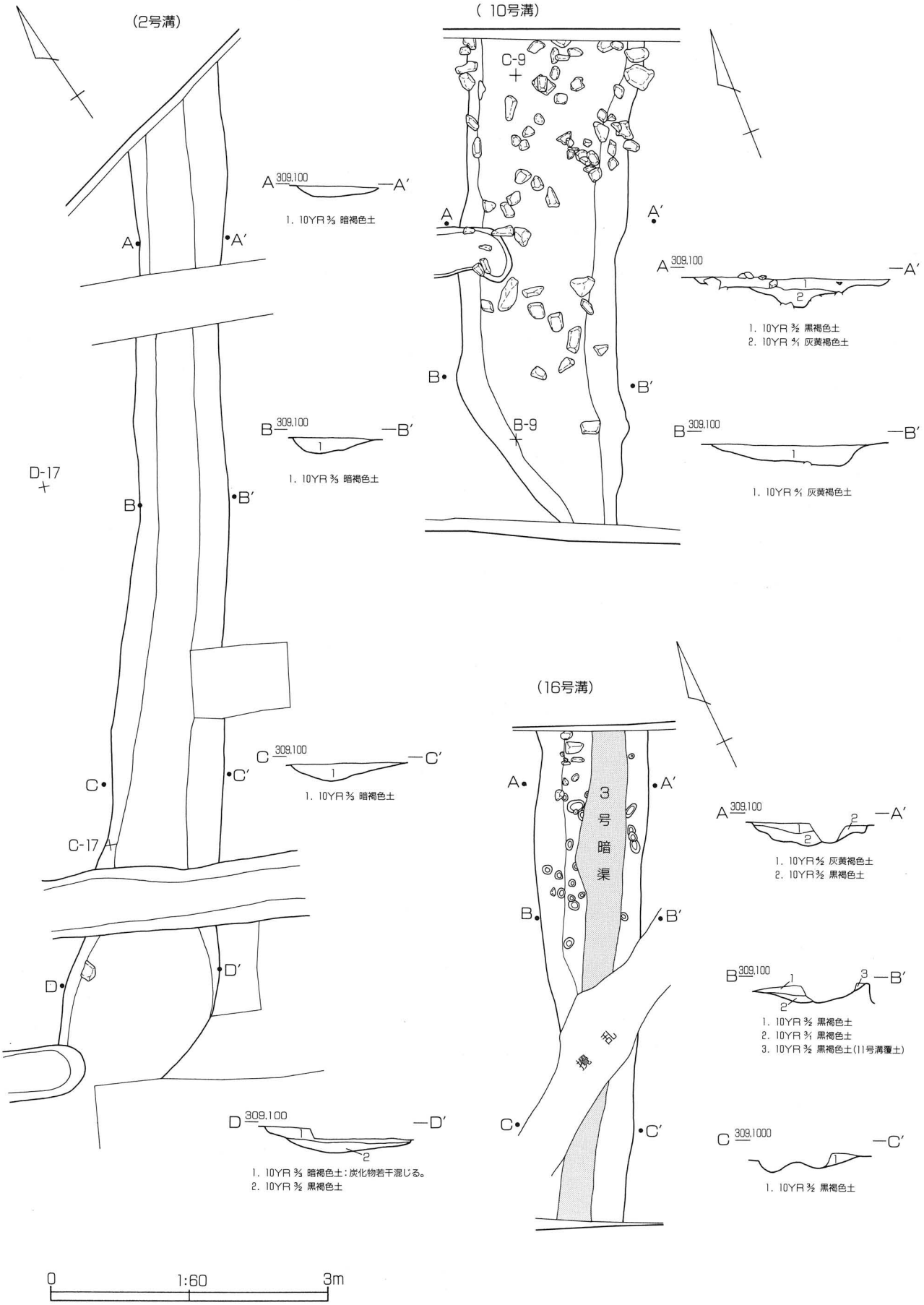


図7　2号・10号・16号溝実測図

13号溝（図９）
Ｂ4グリッドで確認したＮ―60°―Ｅの溝である。
検出長は約2.44ｍ、幅は約32cm、深さは13cmを測る。ピット43に切られる。区画溝とみられ、北東側は、調査区外に続くものとみられる。
遺物は、出土しておらず、時期は不明である。

14号溝（図９）
Ｂ11・12グリッドで確認したＮ―30°―Ｗの溝である。
検出長は約6.61ｍ、幅は最大で36cm、深さは約５cmと浅い溝である。６号溝に切られ、９号溝を切る。北東方向は６号溝に切られ、途中で、確認できなくなる。南西方向は集石土壙に切られ、以降、確認できなくなる。
遺物は、出土しておらず、時期は不明である。

15号溝（図９）
Ａ7、Ｂ7、Ｃ7グリッドで確認したＮ―25°―Ｗの溝である。
検出長は約7.98ｍ、幅は48cm、深さは５cmを測る。北東方向、南西方向に続くものとみられる。
遺物は、出土しておらず、時期は不明である。

16号溝（図７・写真11）
Ａ6、Ｂ6、Ｃ6グリッドで確認したＮ―70°―Ｅの溝である。
検出長は、約5.09ｍ、幅約1.14ｍ、深さ15cmを測る。２号暗渠、３号暗渠に切られ、11号溝を切る。南東側は確認できなくなるが北東側は、調査区外に続くものとみられる。
遺物は、１点を図示した（図18―36）。この他、覆土から多くの焼土塊を検出した。
遺物、他の遺構との関係から、中世の溝と考えられる。

17号溝（図15～16・写真29）
Ａ7、Ｂ7、Ｃ7グリッドで確認したＮ―70°―Ｅの溝である。
検出長は約5.31ｍ、幅は最大で19cm、深さは約22cmを測り、南西に向かって深くなる。溝の西側には小礫を伴う溝状の落ち込みが平行しており、これらの溝を切る形で４号暗渠が造られている。北東方向・南東方向ともに調査区外に続いているものとみられる。
遺物は、磁器、土師質土器が数点出土している。遺物はいずれも小片であり、遺構の時期は不明である。

18号溝（図11・写真12～13、19）
Ａ9、Ｂ9、Ｃ9グリッドで確認した、Ｎ―75°―Ｅの溝である。
検出長は、約5.44ｍ、幅は86cm、深さは32cmを測る。溝は、石積を伴うもので、19号溝とほぼ時期を同じくして、造られたものとみられる。溝の北東側は調査区外に続くものとみられるが、南東側では石積がはっきりとせず、延長を確認できなかった。
遺物は、３点を図示している（図18―37～39）。この他、磁器、陶器の小片、土師質土器の擂鉢を出土している。
遺物、重複関係から、近世以降の溝と思われる。

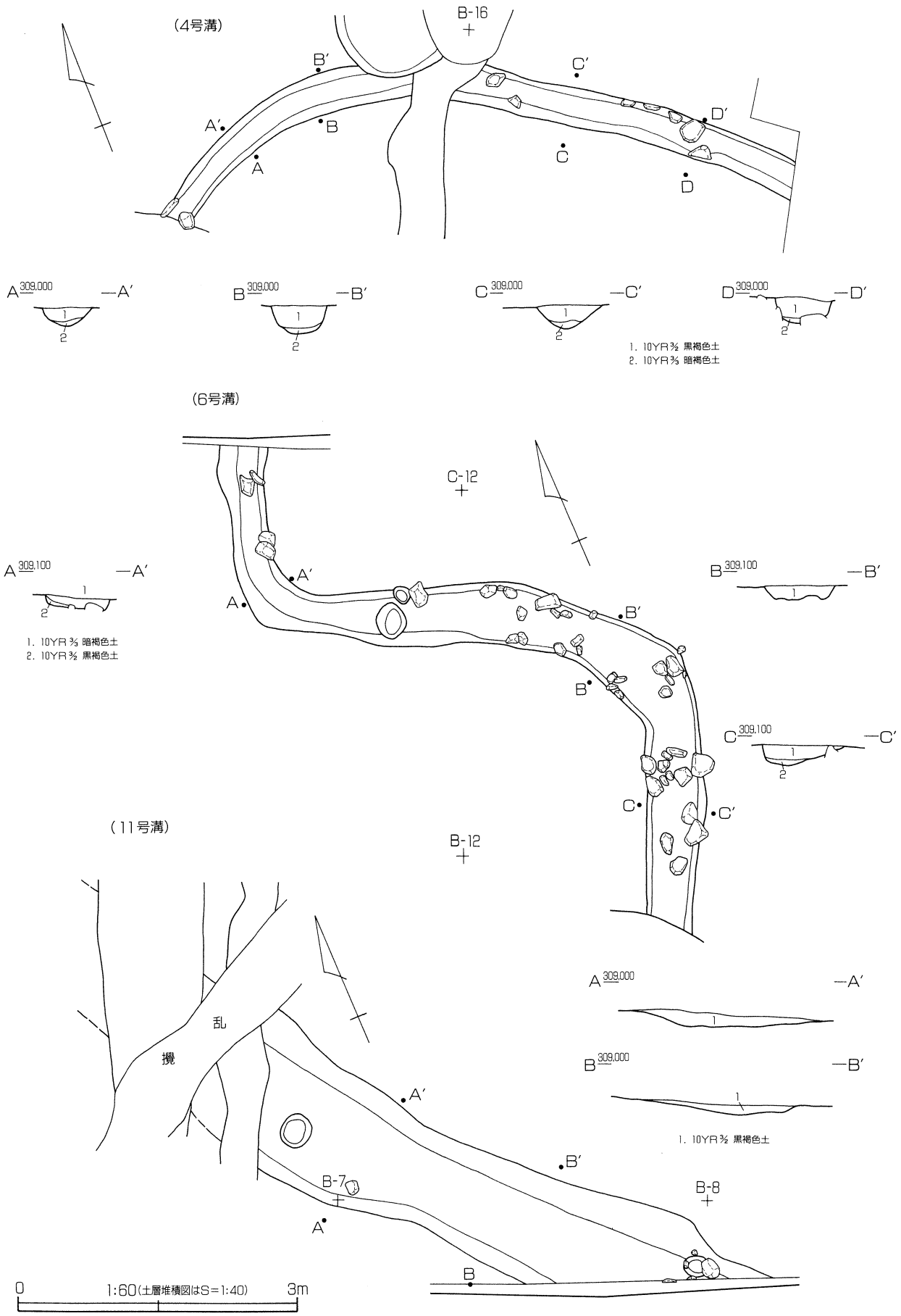


図8　4号・4号・11号溝実測図

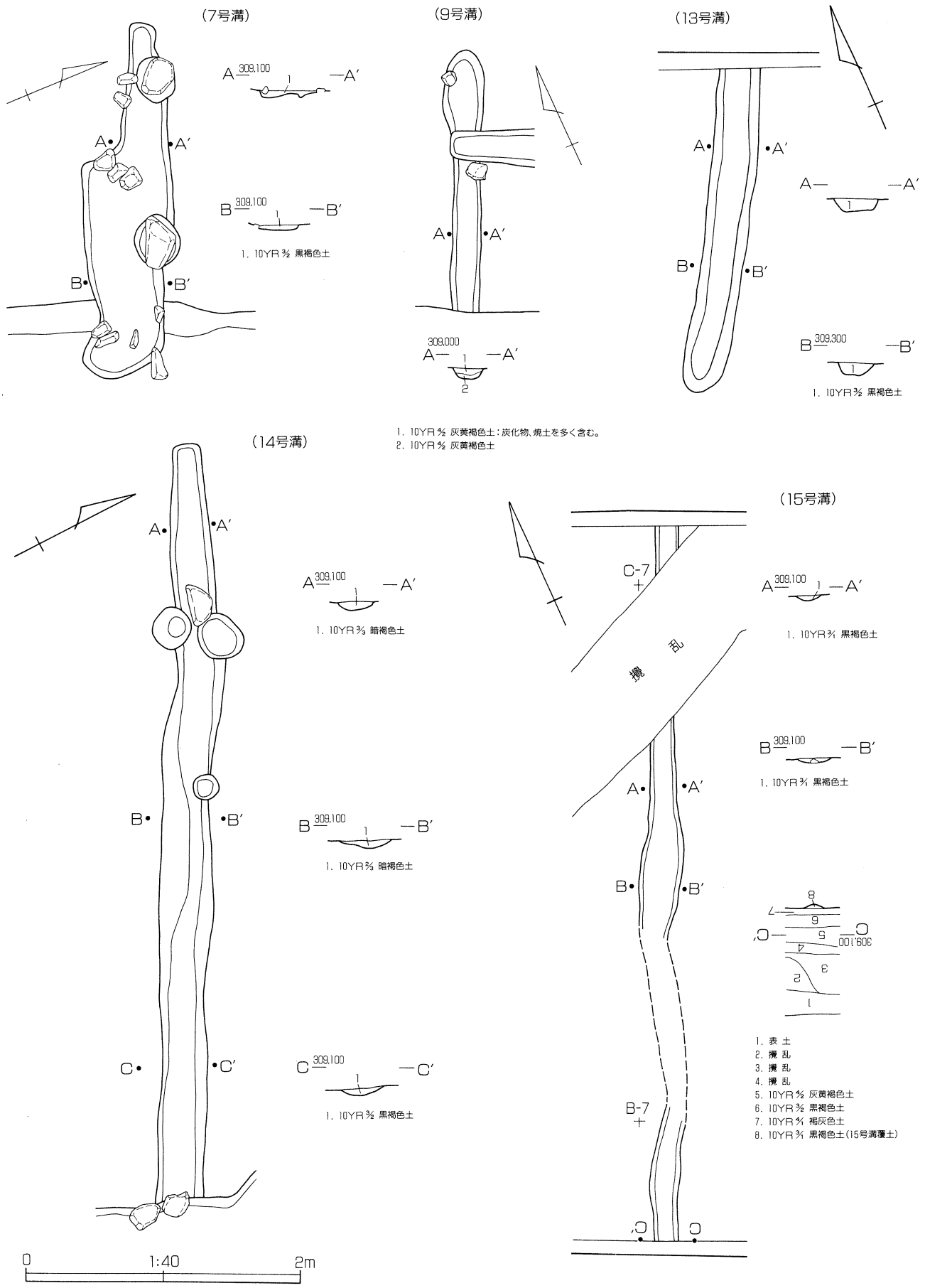


図9　7号・9号・13号～15号溝実測図

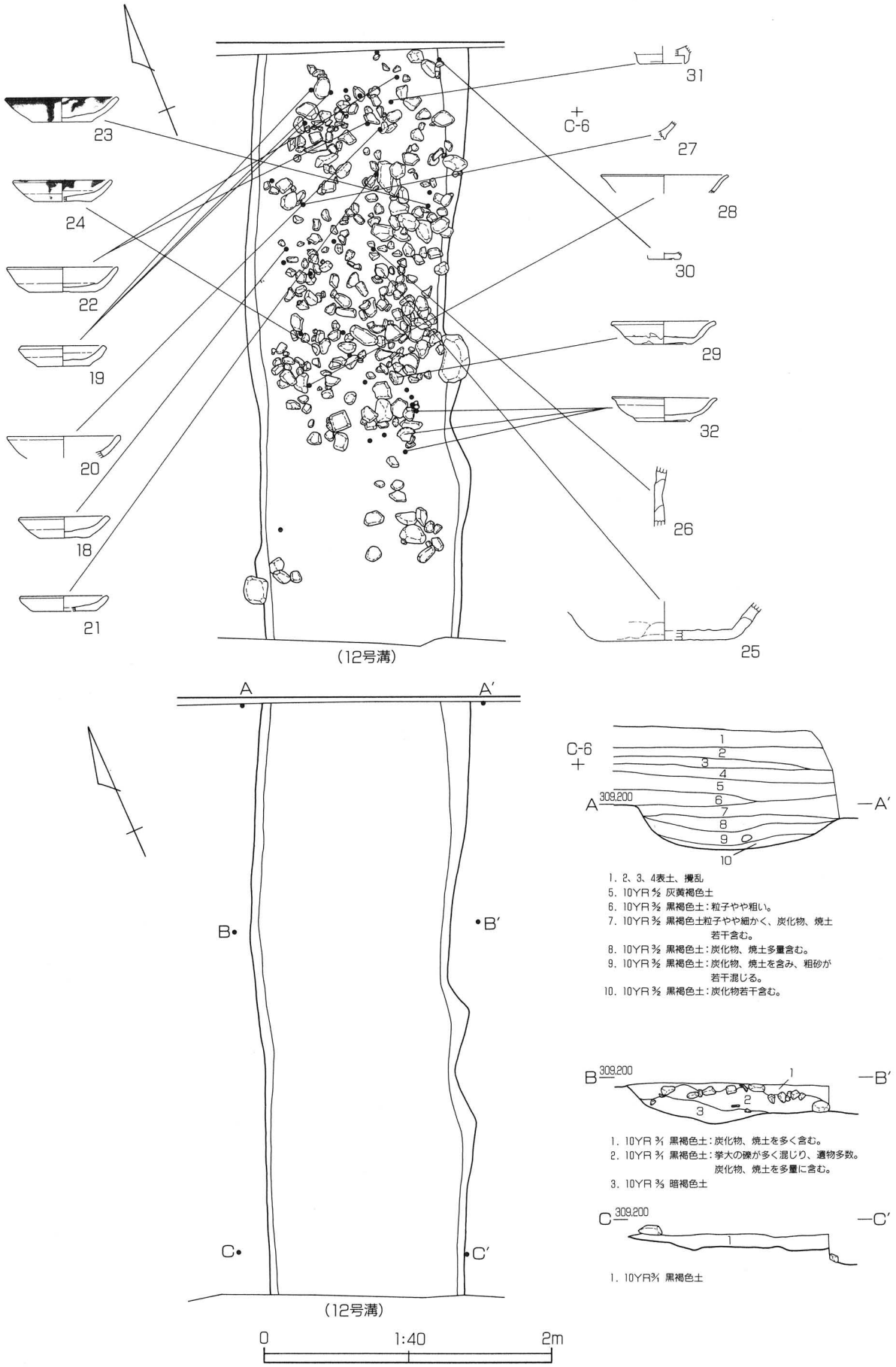
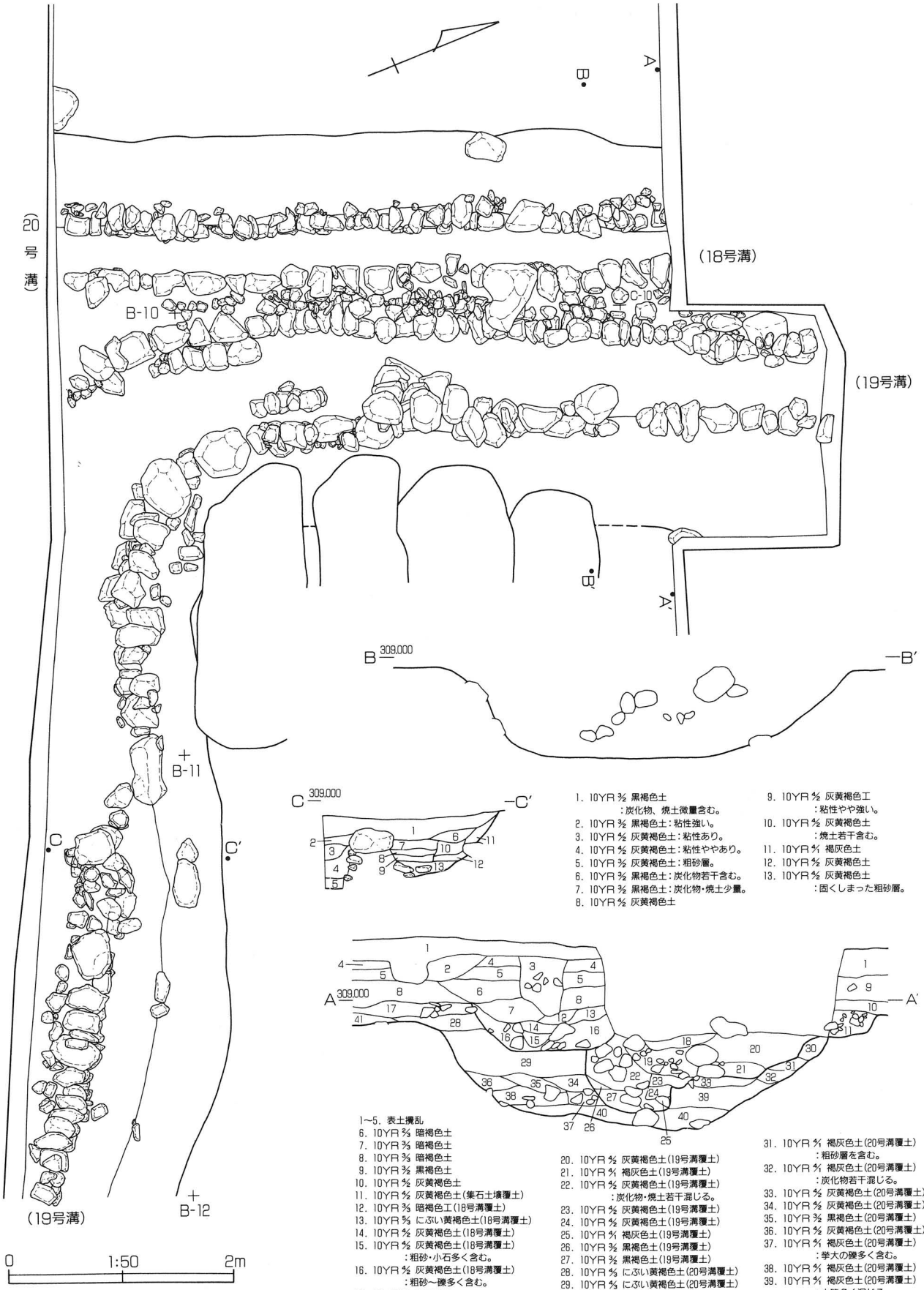


図10　12号溝遺物出土状況、実測図



1. 10YR 3/2 黒褐色土
：炭化物、焼土微量含む。
2. 10YR 3/2 黒褐色土：粘性強い。
3. 10YR 5/2 灰黄褐色土：粘性あり。
4. 10YR 5/2 灰黄褐色土：粘性ややあり。
5. 10YR 3/2 灰黄褐色土：粗砂層。
6. 10YR 3/2 黒褐色土：炭化物若干含む。
7. 10YR 3/2 黒褐色土：炭化物・焼土少量。
8. 10YR 5/2 灰黄褐色土
9. 10YR 5/2 灰黄褐色工
：粘性やや強い。
10. 10YR 5/2 灰黄褐色土
：焼土若干含む。
11. 10YR 5/1 褐灰色土
12. 10YR 5/2 灰黄褐色土
13. 10YR 5/2 灰黄褐色土
：固くしまった粗砂層。

1～5. 表土攪乱
6. 10YR 3/3 暗褐色土
7. 10YR 3/3 暗褐色土
8. 10YR 3/3 暗褐色土
9. 10YR 3/2 黒褐色土
10. 10YR 5/2 灰黄褐色土
11. 10YR 5/2 灰黄褐色土(集石土壙覆土)
12. 10YR 3/3 暗褐色工(18号溝覆土)
13. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土(18号溝覆土)
14. 10YR 5/2 灰黄褐色土(18号溝覆土)
15. 10YR 5/2 灰黄褐色土(18号溝覆土)
：粗砂・小石多く含む。
16. 10YR 5/2 灰黄褐色土(18号溝覆土)
：粗砂～礫多く含む。
17. 10YR 3/3 暗褐色土
18. 10YR 3/4 灰黄褐色土(19号溝覆土)
19. 10YR 1/4 褐灰色土(19号溝覆土)
20. 10YR 5/2 灰黄褐色土(19号溝覆土)
21. 10YR 5/1 褐灰色土(19号溝覆土)
22. 10YR 5/2 灰黄褐色土(19号溝覆土)
：炭化物・焼土若干混じる。
23. 10YR 5/2 灰黄褐色土(19号溝覆土)
24. 10YR 5/2 灰黄褐色土(19号溝覆土)
25. 10YR 5/1 褐灰色土(19号溝覆土)
26. 10YR 3/2 黒褐色土(19号溝覆土)
27. 10YR 3/2 黒褐色土(19号溝覆土)
28. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土(20号溝覆土)
29. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土(20号溝覆土)
：炭化物・焼土を含む。
30. 10YR 5/1 褐灰色土(20号溝覆土)：
：炭化物若干含む。
31. 10YR 5/1 褐灰色土(20号溝覆土)
：粗砂層を含む。
32. 10YR 5/1 褐灰色土(20号溝覆土)
：炭化物若干混じる。
33. 10YR 5/2 灰黄褐色土(20号溝覆土)
34. 10YR 5/2 灰黄褐色土(20号溝覆土)
35. 10YR 3/2 黒褐色土(20号溝覆土)
36. 10YR 5/2 灰黄褐色土(20号溝覆土)
37. 10YR 5/1 褐灰色土(20号溝覆土)
：拳大の礫多く含む。
38. 10YR 5/1 褐灰色土(20号溝覆土)
39. 10YR 5/1 褐灰色土(20号溝覆土)
：中礫多く混じる。
40. 10YR 5/2 灰黄褐色土(20号溝覆土)
41. 10YR 5/2 灰黄褐色土

図11　18号～20号溝実測図

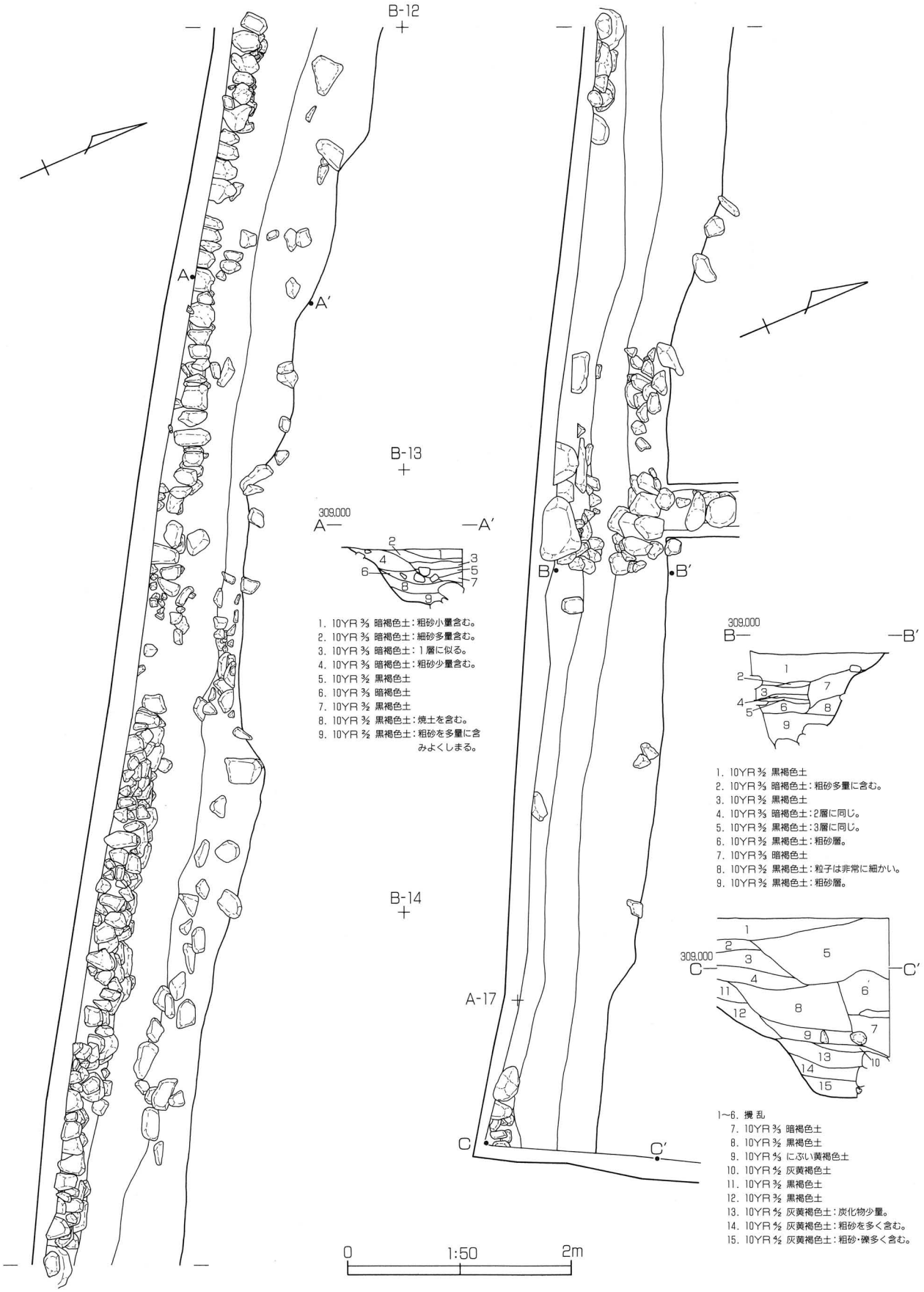

B-12
A
A′
B-13
309.000
A
A′
1. 10YR 3/3 暗褐色土：粗砂小量含む。
2. 10YR 3/3 暗褐色土：細砂多量含む。
3. 10YR 3/3 暗褐色土：1層に似る。
4. 10YR 3/3 暗褐色土：粗砂少量含む。
5. 10YR 3/2 黒褐色土
6. 10YR 3/3 暗褐色土
7. 10YR 3/2 黒褐色土
8. 10YR 3/2 黒褐色土：焼土を含む。
9. 10YR 3/2 黒褐色土：粗砂を多量に含みよくしまる。
B-14
A-17
B
B′
309.000
B
B′
1. 10YR 3/2 黒褐色土
2. 10YR 3/3 暗褐色土：粗砂多量に含む。
3. 10YR 3/2 黒褐色土
4. 10YR 3/3 暗褐色土：2層に同じ。
5. 10YR 3/2 黒褐色土：3層に同じ。
6. 10YR 3/2 黒褐色土：粗砂層。
7. 10YR 3/3 暗褐色土
8. 10YR 3/2 黒褐色土：粒子は非常に細かい。
9. 10YR 3/2 黒褐色土：粗砂層。
309.000
C
C′
1～6. 攪乱
7. 10YR 3/3 暗褐色土
8. 10YR 3/2 黒褐色土
9. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土
10. 10YR 5/2 灰黄褐色土
11. 10YR 3/2 黒褐色土
12. 10YR 3/2 黒褐色土
13. 10YR 5/2 灰黄褐色土：炭化物少量。
14. 10YR 5/2 灰黄褐色土：粗砂を多く含む。
15. 10YR 5/2 灰黄褐色土：粗砂・礫多く含む。
C
C′
0
1:50
2m

図12　19号溝実測図

19号溝（図11～12・写真13～19）

A10・11・12・13・14・15・16・17、B10、C10グリッドで確認した溝である。

幅は最大で約1.54m、深さは約26cmを測る。4号溝、6号溝、9号溝を切る。溝はA10・11グリッド付近で大きく屈曲し、調査区東端まで確認できる。18号溝と同じく石積を伴う。C10以北はさらに続いていることを試掘で確認しているが、東側に向かって軸を幾分南に振っており、A15以東は、きちんとした石積を確認できなくなる。

遺物は、12点を図示している（図18―40～51）。この他、磁器、陶器、土師質土器の小片が出土している。

遺物に中世から近世にかけての混在がかなり認められるものの、19号溝は18号溝とほぼ同時代に機能していたものと判断しており、遺物、重複関係から、18号溝と同じく、近世以降に機能した溝と考えている。

20号溝（図11・写真19～20）

A10、B10、C10グリッドで確認した溝である。

幅約4.14m、深さ約94cmを測る。18号溝、19号溝、集石土壙に切られる。溝は19号溝と方向を同じくしており、北東方向、南東方向ともに、調査区外に続くとみられる。

遺物は、8点を図示している（図19―52～59）。この他、磁器、陶器、土師質土器の小片数点が出土している。

19号溝に切られているため、同じく中世から近世の遺物の混在が認められるものの遺物、重複関係から16世紀代、中世後半に機能した、屋敷の区画溝ではないかと思われる。

（山﨑雅恵）

5　集石土壙（図3・写真21～22）

調査区中央、B10・11、C10・11グリッドから検出した。14・19号溝と重複する。規模は、長軸1.5～2.5m、短軸70～85cm、深さ40cm程度であり、いずれも東西方向に長軸を揃えている。集石の広がりから5～6基が並んで構築されていたようであるが、明確に掘り込みが確認されたのは4基だけであった。いずれの掘り込みも覆土は、小礫から幼児頭大の石を使用して埋戻されていた。

出土遺物は、古代の須恵器から18世紀代の近世陶磁器まで出土しいている。主体となるものは近世陶磁器となる。瀬戸美濃産の碗・擂鉢・灯明皿、九州系陶磁の碗・皿などがある。他に中世戦国期のロクロ成形され底部糸切り痕が残るかわらけ、16世紀前半代に位置づけられる見込みに印花文を押印した、瀬戸美濃産の灰釉皿がある。

6　暗　　渠

1号暗渠（図13・写真24）

調査区東側、B15・16、C15・16、D15・16グリッドから検出し、N―35°―Eの軸となる。北から南に流下し、1、3～5、19号溝及び3号土壙と重複する。部分的に攪乱を受けているが、南北約11.8mにわたり検出した。規模は幅36～60cm、深さ20cm程度を測る。掘り込み内には30cm前後の石を横位に並べて据えているのが部分的に確認できる。

2号暗渠（図14・写真11、25）

調査区西側、B6、C6グリッドから検出し、N―22°―Eの軸となる。北から南に流下し、

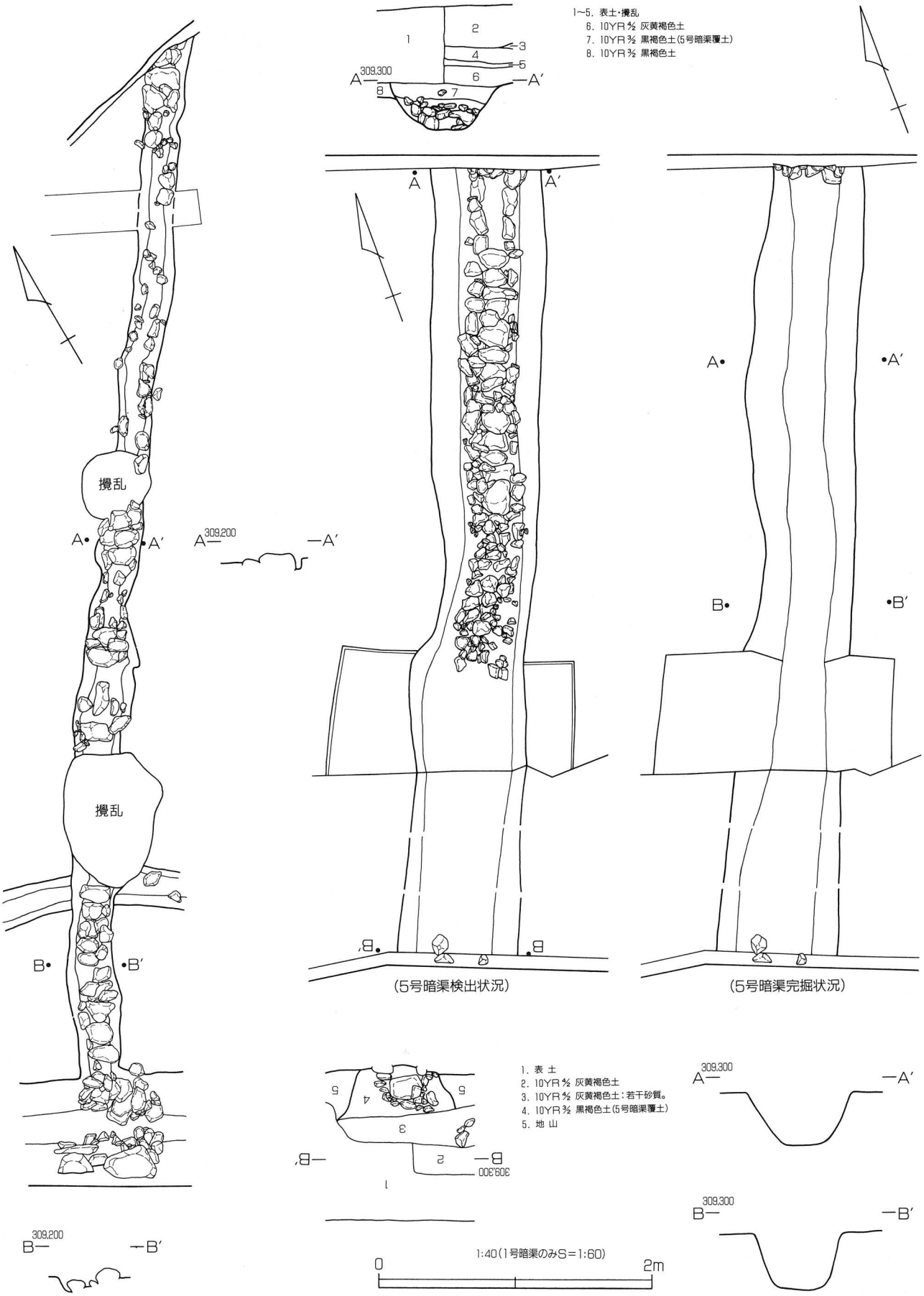


図13　1号・5号暗渠実測図

西側50cmの位置には3号暗渠が隣接する。11号溝と重複し、中央が部分的に攪乱されているが、南北約5.4mにわたり検出した。規模は幅45～60cm、深さ20～28cm程度を測る。幅・深さとも南側に下るに従って僅かにその規模を減じる。断面U字状を呈する掘り込み内には石が雑多に詰め込まれている状態であった。

3号暗渠（図14・写真11、25）

調査区西側、B・C－6グリッドから検出し、N－31°－Eの軸となる。北から南に流下し、東側50cmの位置には2号暗渠が隣接する。11号溝と重複し、中央が部分的に攪乱されているが、南北約5.4mにわたり検出した。規模は幅35～53cm、深さ20cm程度を測る。2号暗渠と同様に、断面U字状を呈する掘り込み内には石が雑多に詰め込まれている状態であった。

出土遺物は中世戦国期のロクロ成形されるかわらけ片、16世紀前半代に位置づけられる瀬戸美濃産の灰釉皿がある。

4号暗渠（図15～16・写真28～29）

調査区西側、B3、C3グリッドから検出し、北から南に流下するが、途中で約40°東側に向きを変え流下する。17号溝と重複し、南側は大きく攪乱を受けている。南北約4.5mにわたり検出した。規模は幅50～60cm、深さ30cm程度を測る。断面U字状を呈する掘り込み内には、石が雑多に詰め込まれている状態であるが、断面観察からは底部付近に比較的大きな石を詰め、その後に小石を詰め込んでいるのが確認できる。

出土遺物は産地不明ながら近世陶器がある。内外面鉄釉が施された鉢となるものであろう（図19－69）。

5号暗渠（図13・写真26～27）

調査区の最も西側、B2、C2グリッドから検出し、N－22°－Eの軸となる。南側は大きく攪乱を受けているが、南北約3.7mにわたり確認した。規模は幅65～85cm、深さ40cm程度を測り、北から南に流下する。断面観察から、掘り込みは断面台形を呈し、20～30cm前後の細長い石を側面に縦方向に並べ、更にその上に横位に据えている。結果的に、幅15cm、高さ8cm程度の空間が確保される構造となる。

7　掘立柱建物跡（図16・写真29）

調査区西側、B2・3、C2・3グリッドに位置する。南北方向に主軸をもち、N－23°－Eの軸となる。4号暗渠・17号溝・8号土壙と重複し、確認した範囲では東西1間×南北2間となる。東西方向3.6m、南北方向3.7mとなる。柱間距離は東西が3.6m、南北ではピット56と65の間が1.7mである以外すべて1.85mとなる。1.85m（6尺1寸）を基準尺度とした建物と推定できよう。柱穴規模はいずれも直径25～30cm、深さ10～20cm程度を測り、8号土壙と重複するピット65以外、扁平な礫が柱穴内から検出されている。　（伊藤正彦）

第3節　遺　　物

本遺跡出土遺物の内、図化して実測図を掲載したものについて、出土遺構・器種・法量・器面調整・胎土等を別表に一覧化した。　（平塚洋一）

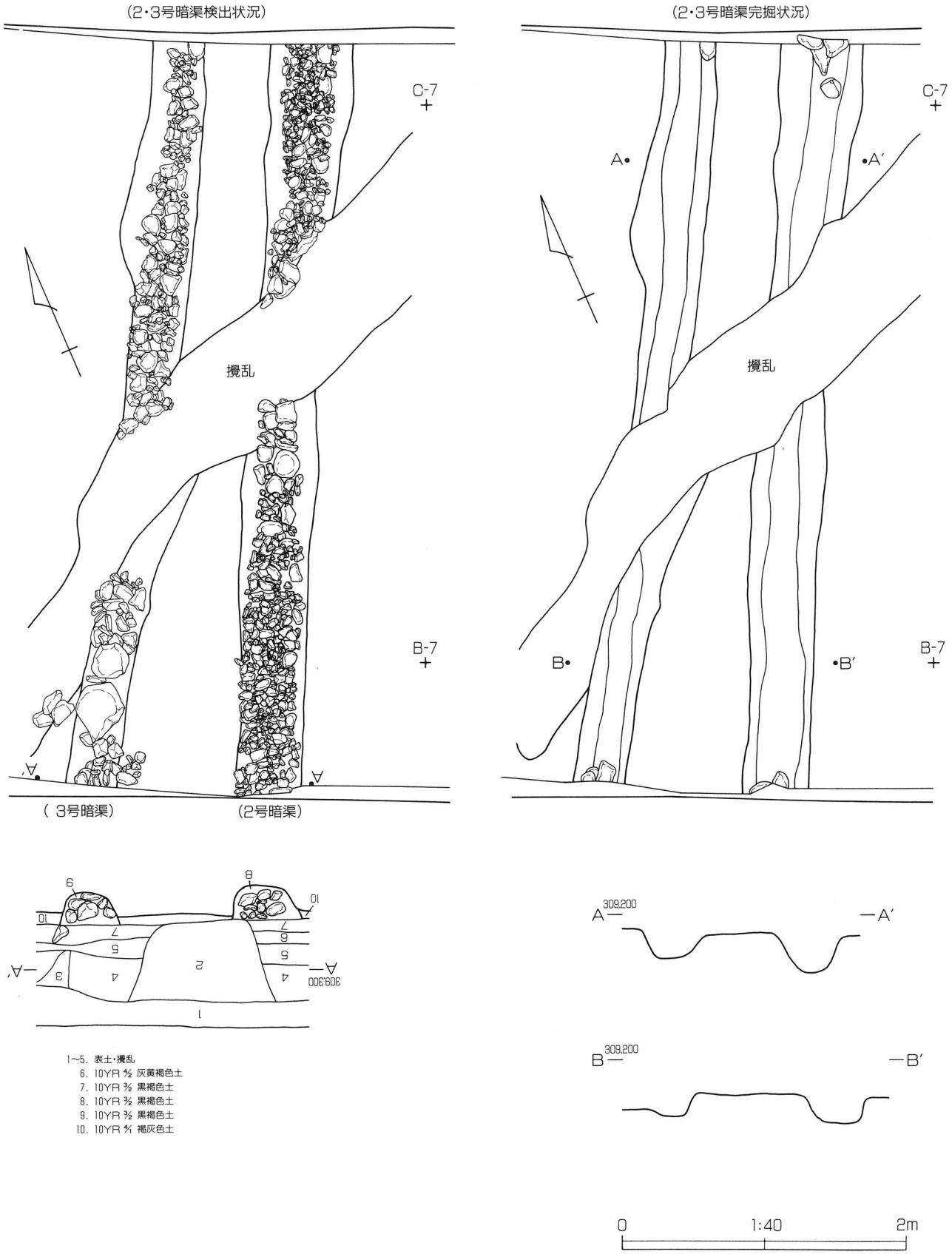


図14　2号・3号暗渠実測図

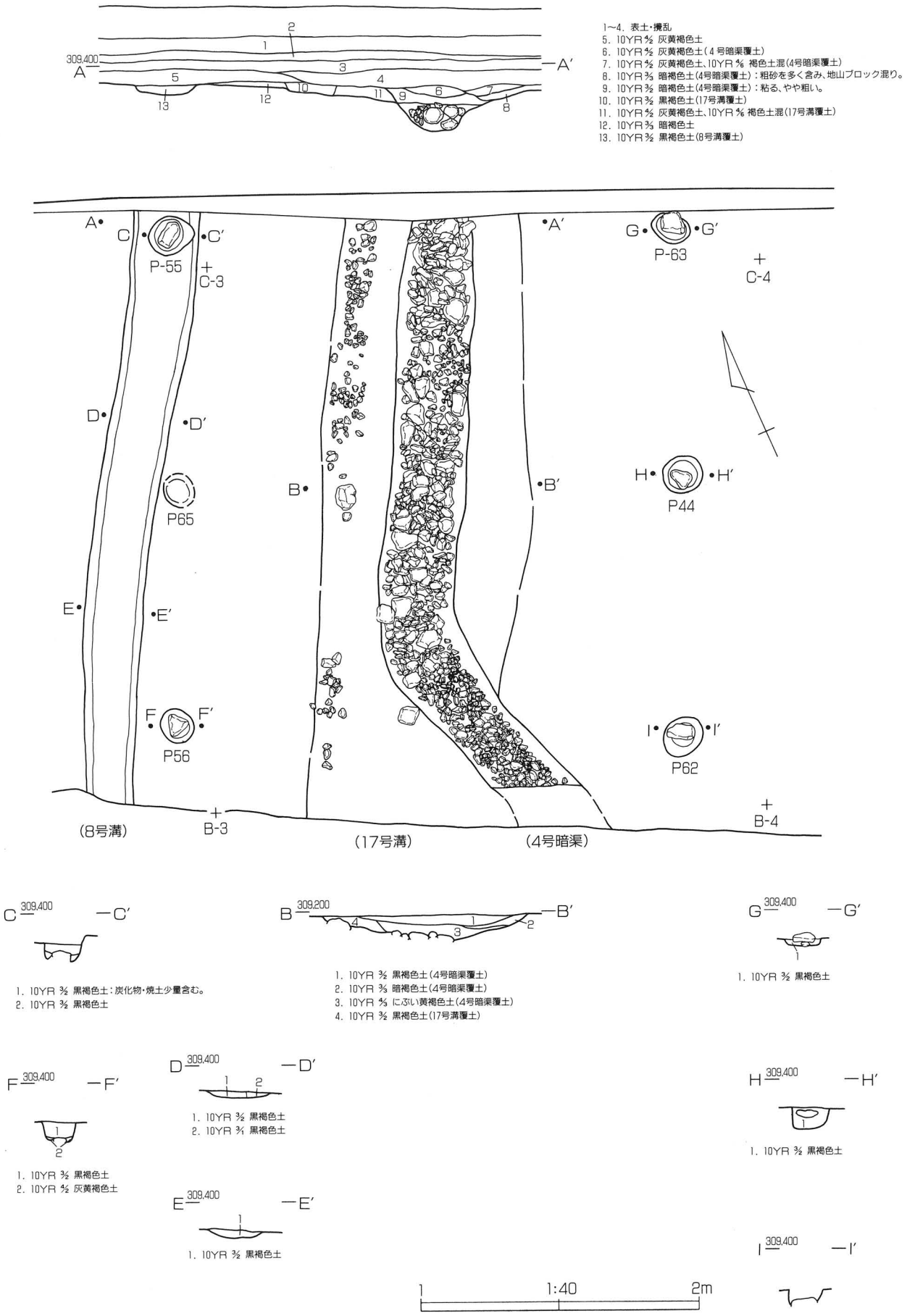


図15　4号暗渠、8号・17号溝実測図

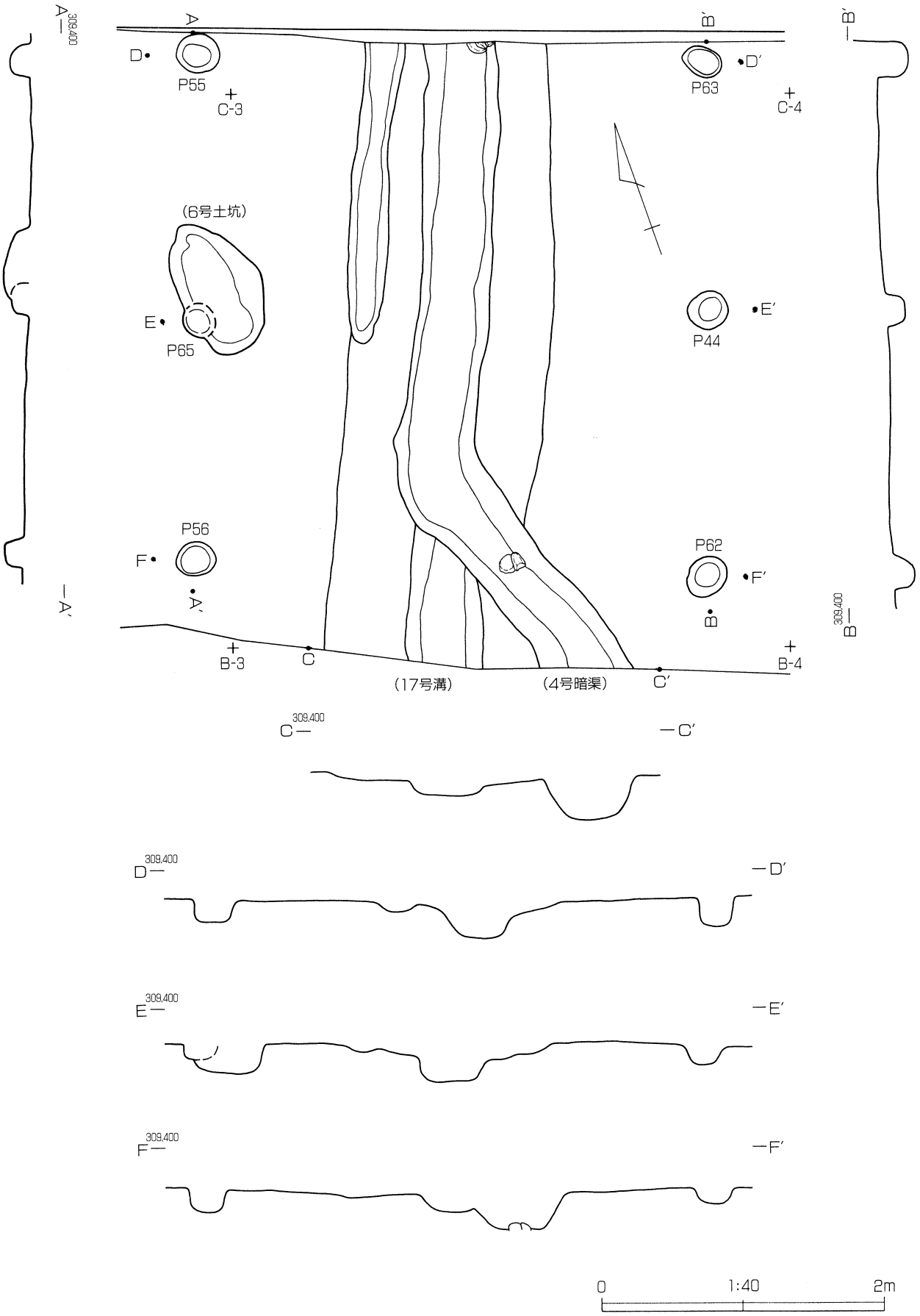


図16　4号暗渠、17号溝実測図

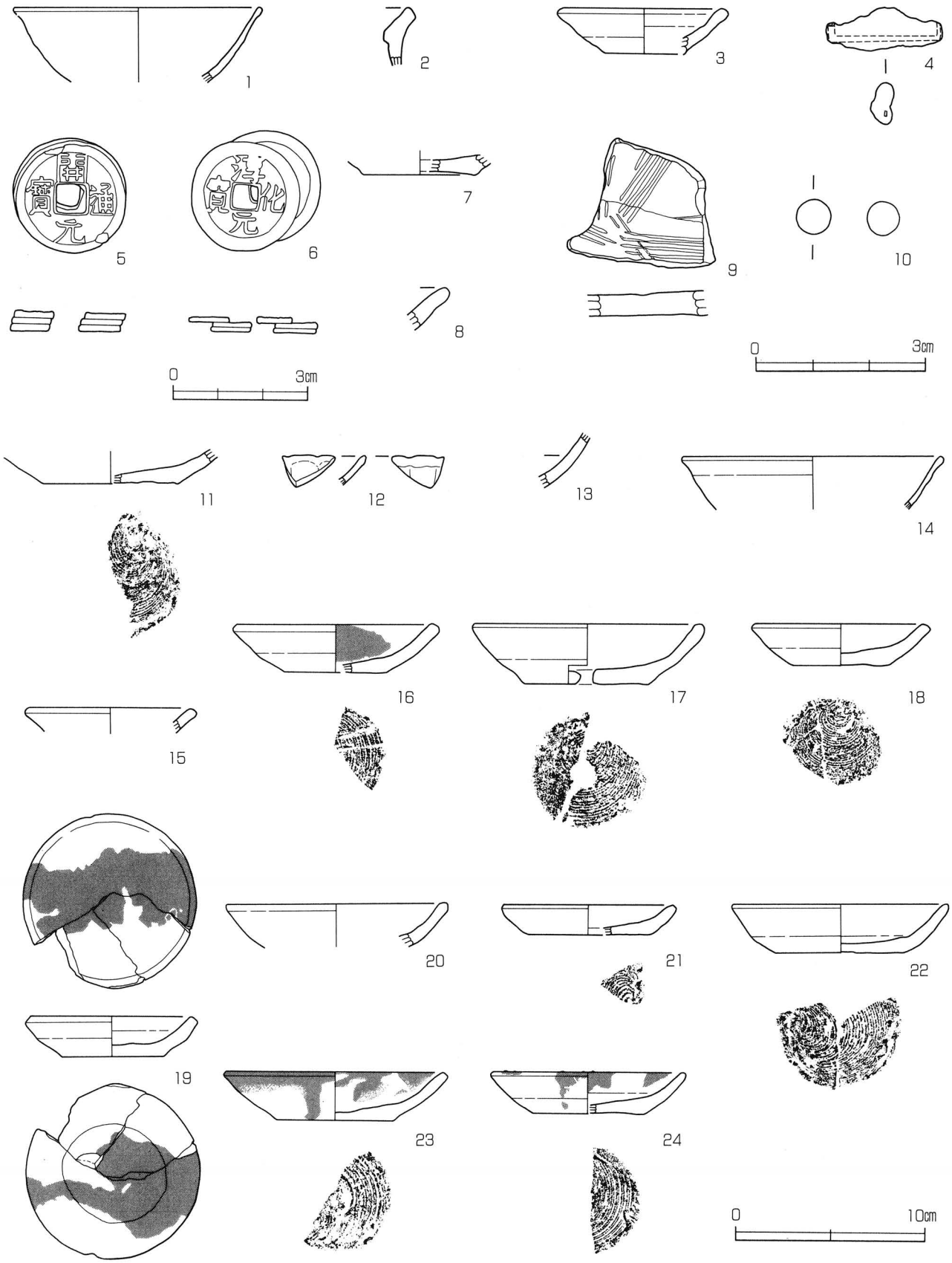
武田城下町遺跡出土遺物

番号	遺構	器種・器形	法量 (口径/器高/底径)cm	調整	胎土	備考
1	1号住居跡	土師器・坏	(13.2)/-/-		緻密(赤色粒子、金雲母を含む)	
2	1号住居跡	土師器・甕	-/-/-	へらなで	やや粗(金雲母・石英・長石・赤色粒子を含む)	甲斐型土器編年IX期。
3	5号土壙	かわらけ・皿	(8.4)/-/-	ろくろなで	やや密(金雲母・長石、赤色粒子を含む)	
4	6号土壙	鉄製品	長さ6.0			
5	6号土壙	古銭	(銭径/穿径/厚さ) 2.4/0.7/0.4			開元通宝外2枚。
6	6号土壙	古銭	(銭径/穿径/厚さ) 2.3/0.6/0.3			淳化元宝外2枚。
7	ピット28	かわらけ・皿	-/-/(6.2)		密(金雲母・長石、赤色粒子を含む)	
8	ピット36	かわらけ・皿	-/-/-	ろくろなで	やや粗(金雲母・石英・長石を含む)	
9	ピット37	土器・擂鉢	-/-/-		やや粗(雲母・石英・含む)	
10	ピット80	鉄砲玉	径1.2			
11	1号溝跡	かわらけ・皿	-/-/(7.2)	ろくろなで	密(金雲母・長石・赤色粒子を含む)	
12	3号溝跡	青磁	-/-/-		緻密	竜泉窯。
13	4号溝跡	灰釉陶器	-/-/-	内面自然釉	緻密	
14	4号溝跡	土師器・坏	(13.8)/-/-	ろくろなで	密(雲母・石英・赤色粒子を含む)	甲斐型編年X期。
15	4号溝跡	土師器・坏	(8.8)/－/－	ろくろなで	密(金雲母・石英を含む)	
16	10号溝跡	かわらけ・皿	(10.4)/2.6/ (5.4)	ろくろなで	密(長石・石英を含む)	内面に溶融物付着、被熱のため瓦質化。
17	10号溝跡	かわらけ・皿	(12.2)/3.2/6.4	ろくろなで	密(金雲母・石英・長石・赤色粒子を含む)	底部に径6㎜の穿孔。
18	12号溝跡	かわらけ・皿	(9.0)/2.2/5.0	ろくろなで	密(金雲母・石英・長石を含む)	
19	12号溝跡	かわらけ・皿	8.6/2.2/5.5	ろくろなで	密(金雲母・長石をわずかに含む)	内面に炭化物、内外面にススが帯状に付着。

番号	遺　構	器種・器形	法　量 (口径/器高/底径)cm	調　　整	胎　　土	備　　考
20	12号溝跡	かわらけ・皿	(11.8)/-/-	ろくろなで	密(金雲母・石英・赤色粒子・長石を含む)	
21	12号溝跡	かわらけ・皿	(9.0)/1.6/(6.4)	ろくろなで	密(金雲母・石英・赤色粒子・長石を含む)	
22	12号溝跡	かわらけ・皿	(11.6)/2.6/(7.0)	ろくろなで	密(金雲母・石英・長石・赤色粒子を含む)	
23	12号溝跡	かわらけ・皿	(12.0)/2.6/(6.2)	ろくろなで	密(金雲母・石英・長石・赤色粒子を含む)	内外面の口縁部を中心にスス付着。
24	12号溝跡	かわらけ・皿	(10.0)/2.2/(5.8)	ろくろなで	密(金雲母・石英・長石を含む)	口縁部3ヵ所・見込み部に炭化物付着。被熱のため炭化。
25	12号溝跡	土器・火鉢	-/-/(14.2)	なで	やや粗(金雲母・石英・長石を含む)	
26	12号溝跡	土器・鍋	-/-/-	よこなで	やや粗(黒雲母・石英・長石を含む)	
27	12号溝跡	青磁・碗	-/-/-	内外面・底部見込み施釉	緻密	
28	12号溝跡	白磁	(13.0)/-/-	内外面施釉	緻密	被熱。
29	12号溝跡	陶器・皿	(10.6)/2.4/6.0	外面胴部下半ヘラ削り。削り出し高台	密	トチン痕3ヵ所。
30	12号溝跡	陶器・天目茶碗	-/-/3.2	内面施釉	密	
31	12号溝跡	白磁・皿	-/-/(4.8)	内外面・底部見込み施釉	緻密	
32	12号溝跡	瀬戸美濃系陶器・皿	10.8/2.5/5.8	内外面・底部見込み施釉	やや密	輪トチ痕。
33	12号溝跡	古銭	2.5/0.6/0.1			永楽通宝。
34	12号溝跡	鉄製品・釘				
35	12号溝跡	不明鉄製品				
36	16号溝跡	瀬戸美濃系陶器・皿	-/-/(7.0)	内外面施釉	密	
37	18号溝跡	土器・鉢	-/-/(12.2)	なで	やや粗(小石・長石を含む)	
38	18号溝跡	肥前系染付・碗	(10.0)/5.1/(5.6)		緻密	二重網目文(1690-1720)

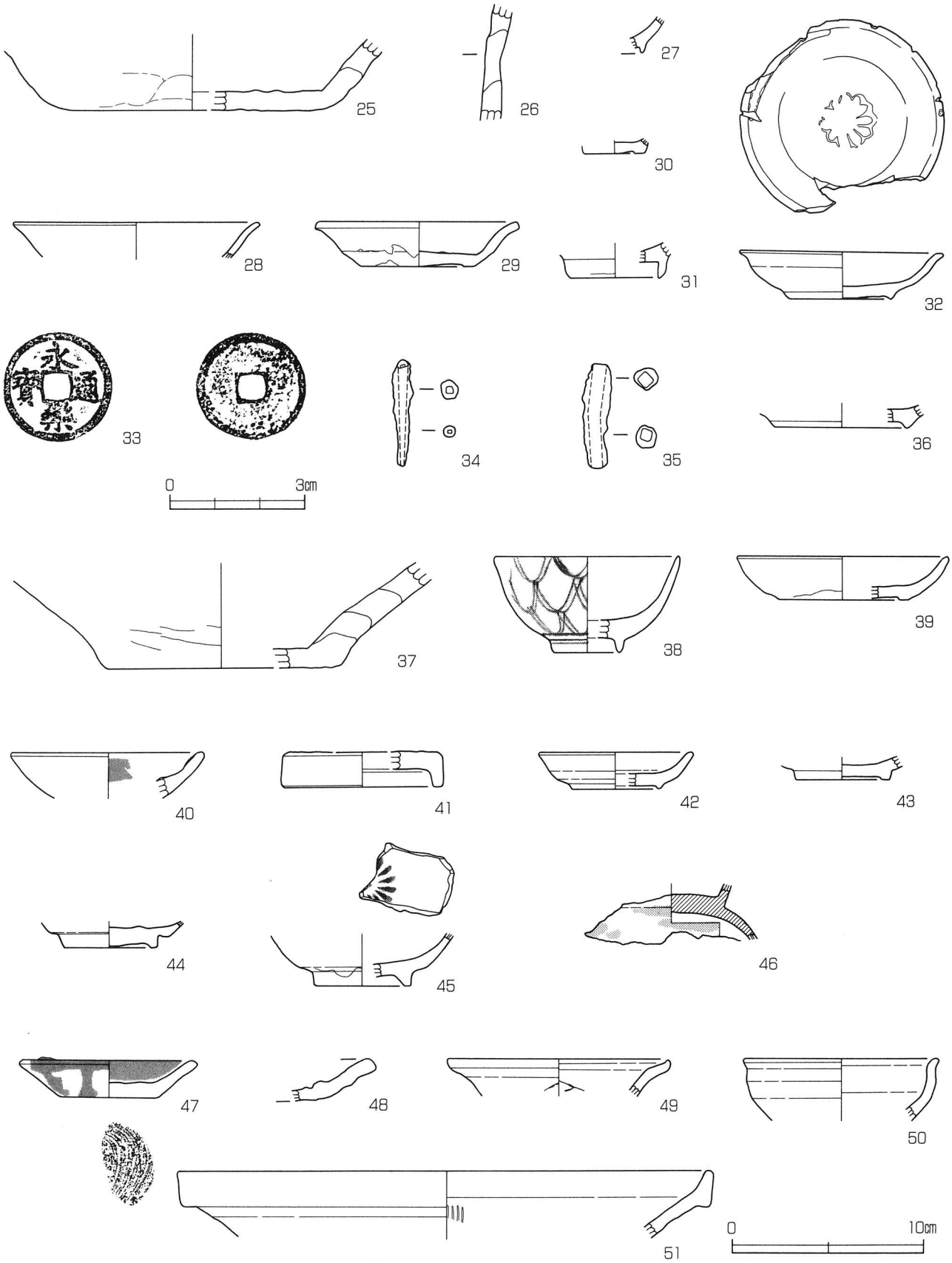
番号	遺　構	器種・器形	法　量 (口径/器高/底径)cm	調　　整	胎　　土	備　　考
39	18号溝跡	陶器・皿	(11.2)/2.3/ (6.8)	内外面施釉	密	
40	19号溝跡	かわらけ・皿	(10.2)/-/-	ろくろなで	やや密(金雲母・長石を含む)	内面に溶融物が付着。
41	19号溝跡	土器(焼塩壺)・蓋	(10.4)/1.9/-	内面に布目	やや粗(石英・長石・小石を含む)	
42	19号溝跡	陶器・皿	(8.2)/-/-	内外面施釉	密	
43	19号溝跡	陶器・皿	-/-/(5.2)	削り出し高台	緻密	
44	19号溝跡	陶器・皿	-/-/5.0	内面施釉、削り出し高台	密	
45	19号溝跡	染付・碗	-/-/(5.0)	内面：染付、外面：鉄釉	緻密	
46	19号溝跡	漆製品・蓋	-/-/-	内外面に赤漆		被熱。
47	19号溝跡下層	かわらけ・皿	(9.0)/2.2/(5.4)	ろくろなで	やや密(石英・長石を含む)	口縁部内面に溶融物付着。被熱のため瓦質。
48	19号溝跡下層	かわらけ・皿	-/-/-		やや密(長石を含む)	内面に溶融物付着、被熱のため歪む。
49	19号溝跡下層	陶器・皿	(11.8)/-/-	内外面施釉	密	焼き付け痕あり。
50	19号溝跡下層	陶器・天目茶碗	(10.2)/-/-	内外面施釉	密	
51	19号溝跡下層	陶器・擂鉢	(28.4)/-/-	鉄釉	密	
52	20号溝跡	かわらけ・皿	-/-/(4.8)	ろくろなで	やや密(石英を含む)	
53	20号溝跡	かわらけ・皿	(12.0)/2.4/ (6.6)	ろくろなで	やや密(石英を含む)	内面にスス付着。被熱のため瓦質。
54	20号溝跡	かわらけ・皿	-/-/-	ろくろなで	密	内外面に溶融物付着。被熱のため瓦質。
55	20号溝跡	土器・鉢	-/-/(10.0)	なで	やや粗(雲母・石英・長石・赤色粒子を含む)	
56	20号溝跡	陶器・丸皿	(11.0)/-/-	内外面施釉	やや密	
57	20号溝跡	陶器・皿	(12.0)/2.2/ (8.0)	内外面施釉	やや密	底部にトチン痕。

番号	遺　構	器種・器形	法　量 (口径/器高/底径)cm	調　　整	胎　　土	備　　考
58	20号溝跡	陶器・皿	-/-/-	内外面施釉	密	
59	20号溝跡	陶器・擂鉢	-/-/-	内外面鉄釉	やや密	
60	集石土壙	かわらけ・皿	11.6/2.9/6.1	ろくろなで	密	
61	集石土壙	かわらけ・皿	-/-/-	ろくろなで	やや密(金雲母・石英・長石を含む)	口縁部に指頭によるつまみ痕。
62	集石土壙	土器・内耳鍋	(28.8)/(5.6)/(26.8)	なで	やや密(雲母・石英を含む)	
63	集石土壙	肥前・染付・皿	-/-/(6.8)		緻密	
64	集石土壙	瀬戸美濃系陶器・皿	-/-/(6.4)	内外面施釉	密	大窯2期。底部にトチン痕。
65	集石土壙	陶器・擂鉢	(20.8)/-/-	ろくろなで	やや密	
66	集石土壙	陶器・灯明皿	(9.4)/1.9/(4.4)	ろくろなで・内面施釉	密	
67	集石土壙	瀬戸美濃系陶器・香炉	(11.0)/-/-	内外面施釉	密	
68	集石土壙	陶器・擂鉢	(29.0)/-/-	ろくろなで	やや粗	
69	4号暗渠	陶器・鉢	(15.4)/-/-	内外面施釉	緻密	
70	B－8	土器・香炉	(9.2)/-/-	なで	やや密(金雲母・長石・赤色粒子を含む)	
71	C－11	常滑・甕	(21.6)/-/-	なで	やや密(石英を含む)	
72	B－11	瀬戸美濃系陶器・皿	(11.4)/2.7/6.1	内外面施釉。見込み部に印花文	密	底部にトチン痕。
73	B－7	陶器・皿	-/-/(4.8)	内外面施釉。見込み部に印花文	密	被熱。
74	C－12	砥石	(幅/長さ/厚さ) (3.0)/3.3/0.7			



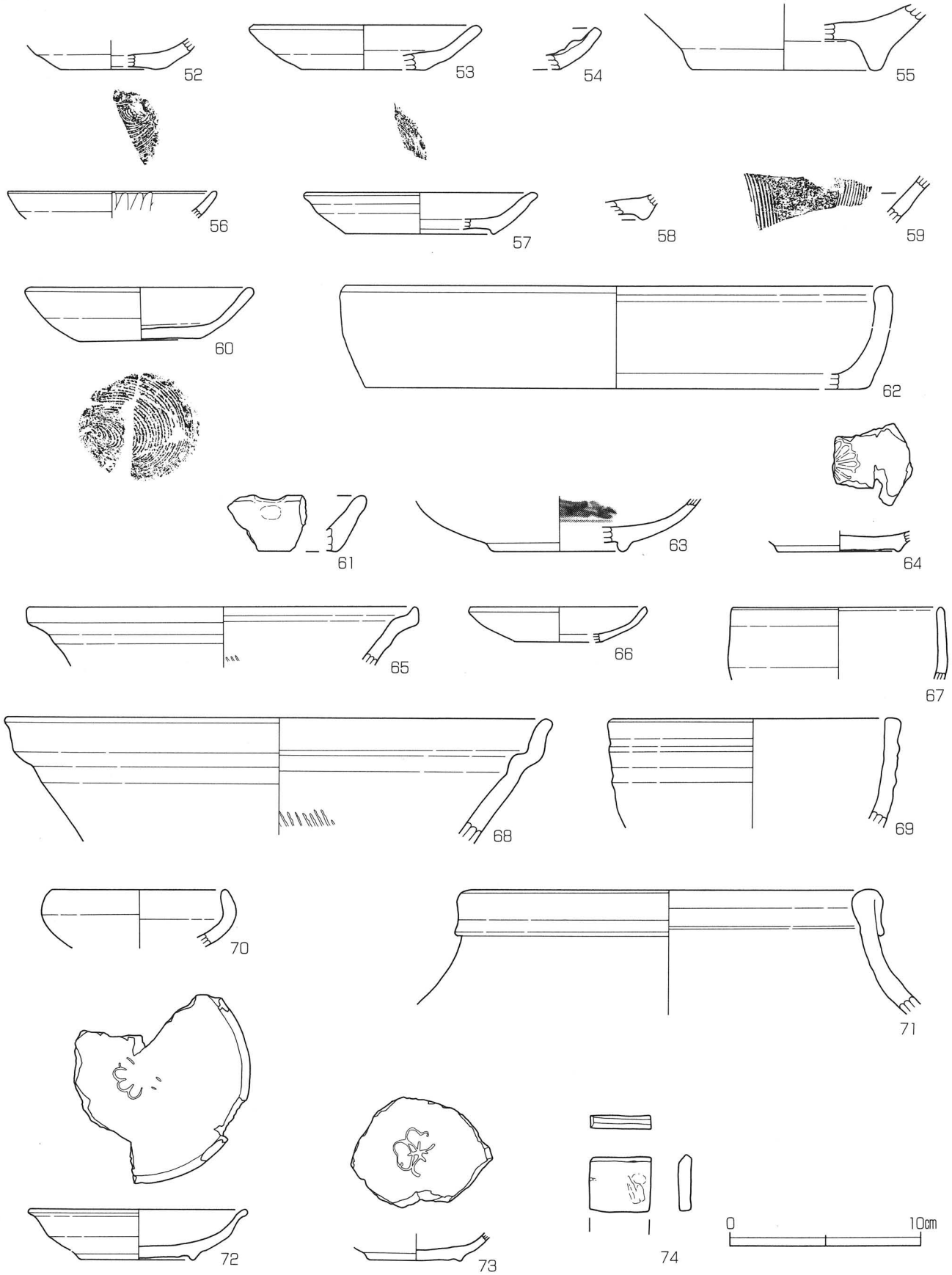
住居跡(1・2)、5号土壙(3)、6号土壙(4～6)、ピット28(7)、ピット36(8)、ピット37(9)、ピット80(10)、
1号溝(11)、3号溝(12)、4号溝(13～15)、10号溝(16・17)、12号溝(18～24)

図17　出 土 遺 物 (1)



12号溝(25～35)、16号溝(36)、18号溝(37～39)、19号溝(40～46)、19号溝下層(47～51)

図18　出 土 遺 物 (2)



20号溝(52～59)、集石土壙(60～68)、4号暗渠(69)、一括遺物(70～74)

図19　出 土 遺 物 (3)

第4章　まとめ

今回の調査では、平安時代、中世、近世各時期の遺構と遺物を検出した。以下に若干のまとめを述べる。

第1節　検出遺構の変遷

平安時代

1号住居跡、4号溝を検出している。住居跡は遺存状態が非常に悪く、範囲のみの確認であった。緩やかな傾斜面下に部分的に残ったものと考えられ、遺構周辺の様子などは不明である。

中世

中世の遺構は、6号土壙、1・3・5・10・12・16・20号溝を検出している。6号土壙に関しては後述する。20号溝は絵図で推定できる小山田氏あるいは諸角氏の屋敷の堀の一画ではないかとみられる。20号溝は近世に至る過程において、部分的に埋め立てられ、石積を伴う18・19号溝に改修されたのち埋め立てられたものとみている。各溝とも出土遺物は少ないが、20号溝から19号溝下層、18号溝、19号溝と順を追って、16世紀中ごろから17世紀の初頭にかけての遺物がほぼまとまって出土しており、この区画は屋敷の使われなくなった後も水路として連綿と利用されていた可能性が高い。

20号溝の区画内の遺構は比較的少ない。検出した1・3・5号溝は若干の振れはあるものの西に18～20°振った主軸方位を示し、南北方向に平行する。畑の遺構ではないかと思われる。調査区南東角に若干のピット群が検出できることから、屋敷の中心部分は調査区外東側に配置されているものと考えている。

20号溝西側には10号溝がほぼ平行している。10号溝と同じく東に約20°主軸を振って平行する12・16号溝の間にはピット群があり、今回の調査では特に並びを確認できなかったが、鉛玉を出土するピットが存在するなど屋敷の外に鍛冶などの技術者が工房あるいは住居を構えた跡があるのではないかと考えられる。10・12・16号溝からは、緑青が浮き出た鉱物の融着物が残るかわらけの破片が出土しており、関連性を窺わせる。

近世以降

近世の遺構と判断できたのは18・19号溝である。切り合いから考えて、4号暗渠も近世の遺構の一つと思われる。

暗渠に関しては、構造上の違いから時期差も考えられるが、出土遺物が少ないこともあり、詳細な時期判断は控えている。歴史背景を考え合わせると、ほとんどは武田滅亡後、一帯が古府中村として耕地化が進められた16世紀末以降に埋設されたものではないかと考えている。

今回の調査では掘立柱建物と報告しているが、6号土壙を切る軸を東に23°振った一連のピットは、限られた検出部分での判断であり、同じく東に約20°軸を振っている17号溝との関連を考えると、あるいは塀などの構造物であった可能性もある。17号溝との関連は出土遺物が少ないこと、検出面が地山であることから判断できなかった。

第２節　武田城下町遺跡営林署跡地点の再葬墓について

今回の調査区内からは再葬墓が１基検出されている。出土遺物から時期を判定することはできなかったが、他の遺構の年代、墓の平面形態などから考えて、15～16世紀に収まる範囲での時期を想定している（野代2000）。

事実記載と重複するが、埋葬されていた骨は、頭蓋骨が北枕東向き、他の四肢骨はまとめて並べ直上に置き石をしている。骨に火葬した痕跡は認められなかった。副葬品は顎付近から、六道銭（判読できたのは渡来銭の開元通宝・淳化元宝の２枚）を検出している。

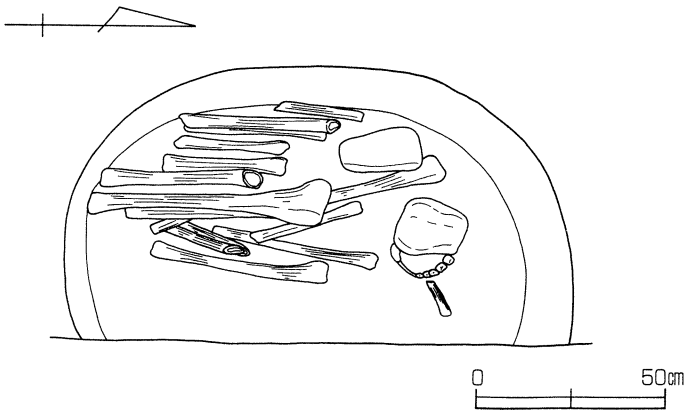


図20　本郷遺跡再葬墓

山梨県下の中世墓で再葬の痕跡が認められるのは、未報告であるが本郷遺跡検出の再葬墓がある。本郷遺跡は甲府市善光寺３丁目に所在する遺跡で1985年の調査例で検出されている。本郷遺跡例の再葬墓は頭蓋骨は北枕、遺存状態が悪く顔の向きは不明である。営林署遺跡例と同じく直葬で、四肢骨は頭の近くにまとめられ、火葬の痕跡は認められない。

副葬品に関しては土師質土器１点が検出されている。周辺から他に９基の土葬墓が検出されているが、詳細な時期に関しては不明であり、中世の墓とされている。

再葬墓は主に縄文時代、弥生時代に行われた埋葬法で、一旦遺体を土中に埋めるなどして肉を腐らせ、骨となったものをまとめて壺や甕、石棺などに改めて埋葬する型式の葬法である。

他県の中世墓の事例は寡聞にして知らないが、15～17世紀に検出される墓の形状・形態は多様であり、葬法には様々な宗教、多様に分化した社会階層の変化の一端が現れていると捉えられている（『考古学ジャーナル』1989）。

再葬墓の事例は県下でもまだ僅かであり、今後、同様の調査例の増加により、時期、多様な中世墓のなかでの再葬墓の位置づけなど、再度の検討が行われることが望まれる。

（山﨑雅恵）

参考文献

野代幸和「山梨県における中近世墓制の変遷」『山梨県考古学協会誌』第11号　山梨県考古学協会　2000

『考古学ジャーナル』no.304　ニューサイエンス社　1989

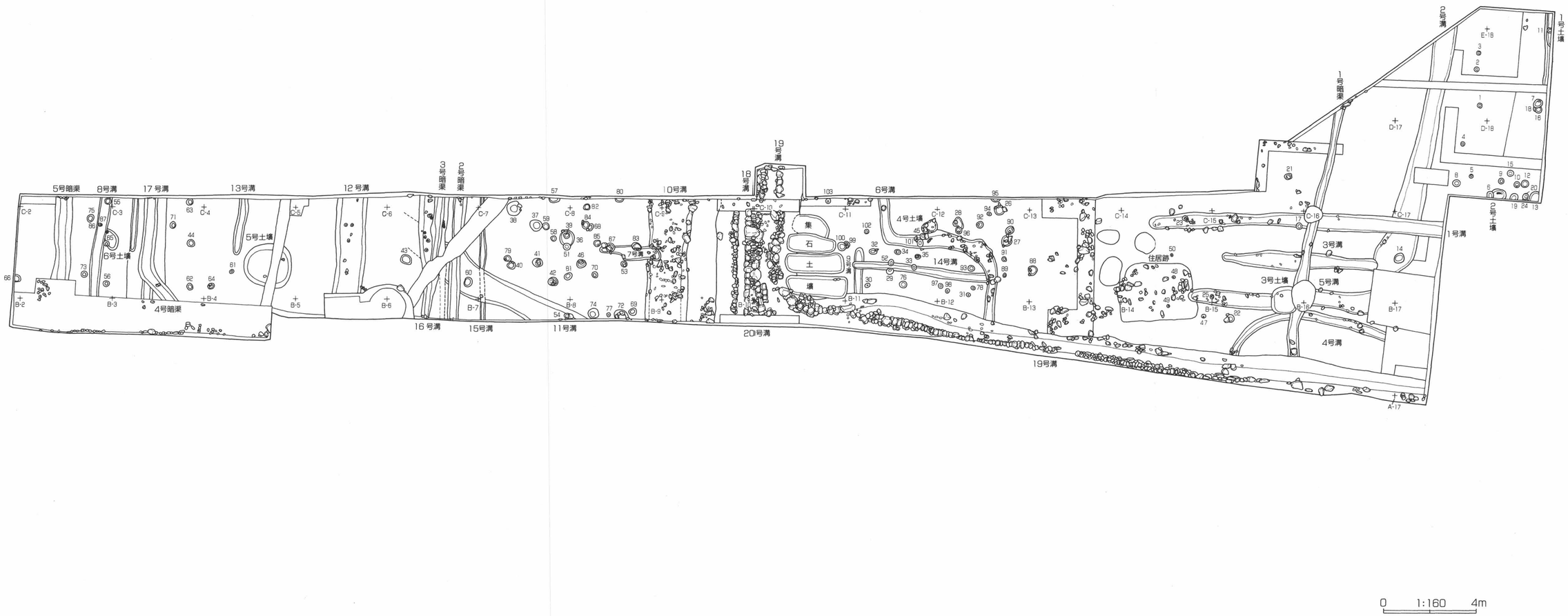


図21　武田城下町遺跡（営林署跡）全体図

写真１　武田城下町（営林署跡）遺跡全景

写真２　１号住居検出状況（東から）

写真３　１号住居遺物出土状況（東から）

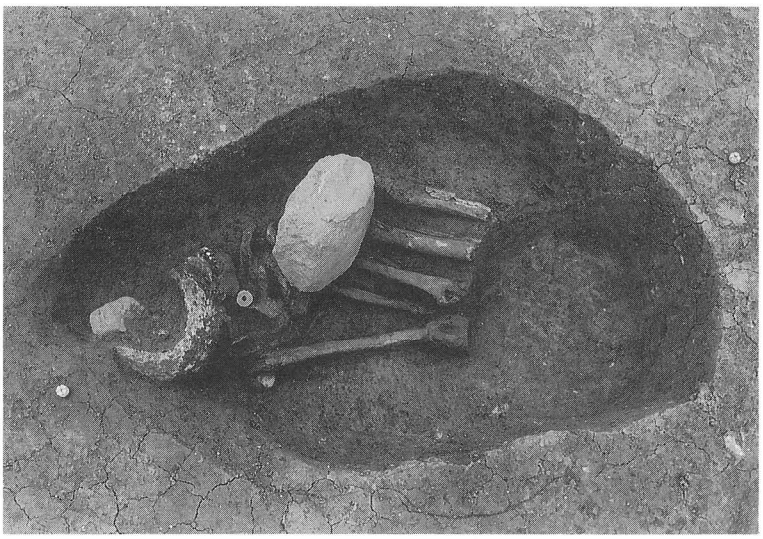


写真４　６号土壙人骨検出状況（西から）

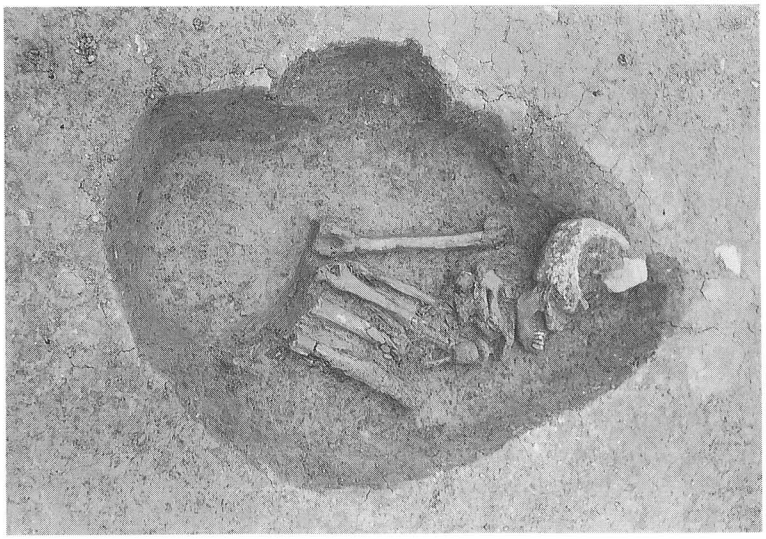


写真５　６号土壙人骨検出状況（東から）

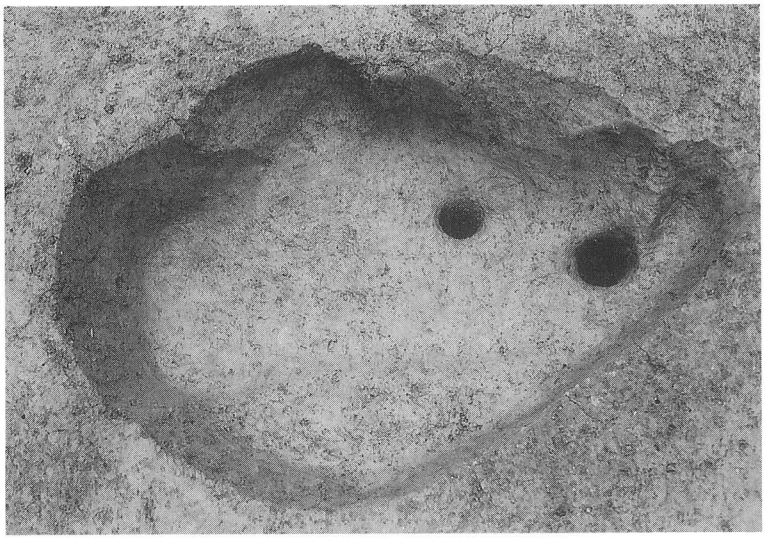


写真６　６号土壙完掘状況（東から）

写真７　ピット群検出状況（北西から）

写真８　１号溝・３号溝・５号溝検出状況（西から）

写真９　12号溝遺物検出状況（南から）

写真10　12号溝完掘状況（南から）

写真11　16号溝・２号暗渠・３号暗渠
検出状況（南から）

写真12　18号溝検出状況（北から）

写真13　18号溝・19号溝検出状況
（北から）

写真14　19号溝検出状況（西から）

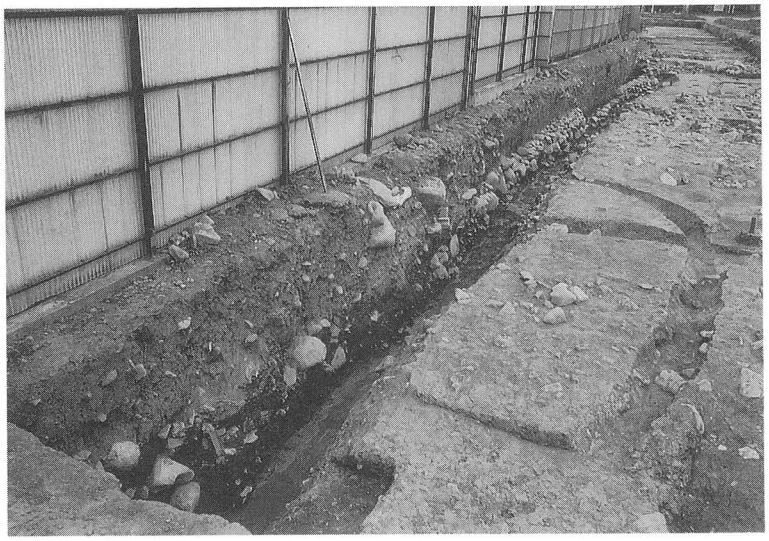


写真15　19号溝検出状況（北東から）

写真16　19号溝石積検出状況（Ａ―11、北から）

写真17　19号溝石積検出状況（Ｂ―13、北から）

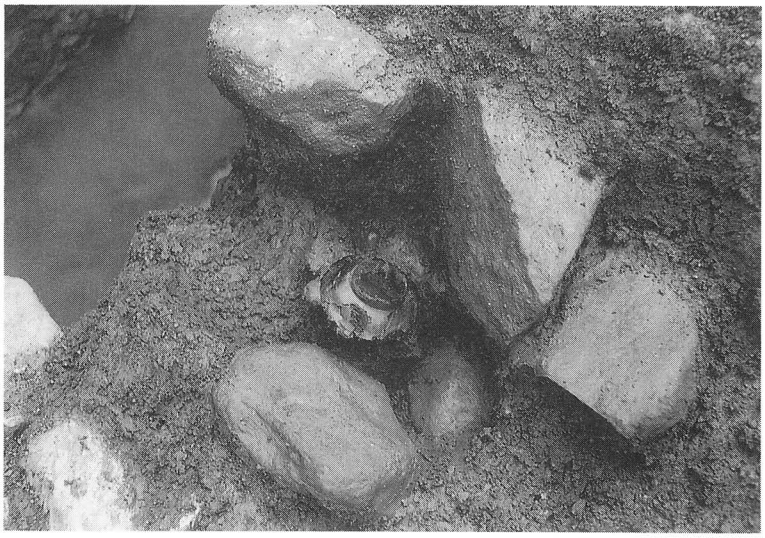


写真18　19号溝漆製品出土状況（南西から）

写真19　18号溝・19号溝・20号溝北壁（南から）

写真20　20号溝検出状況（南から）

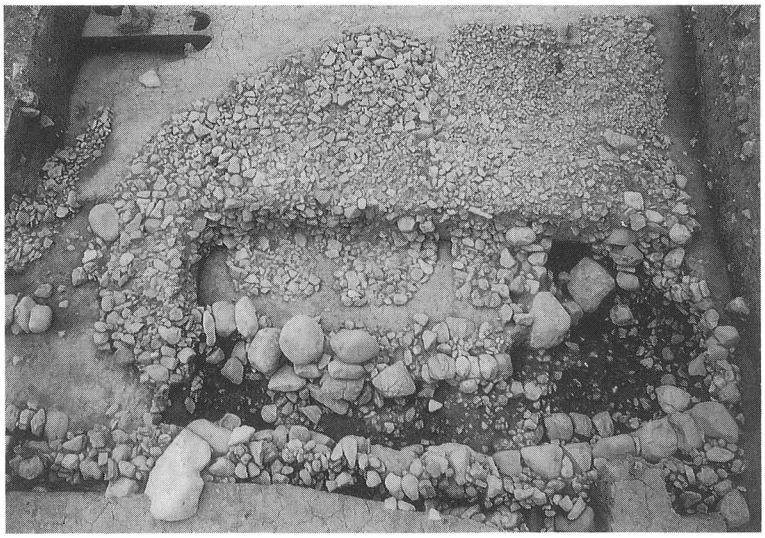


写真21　集石土壙集団範囲検出状況（西から）

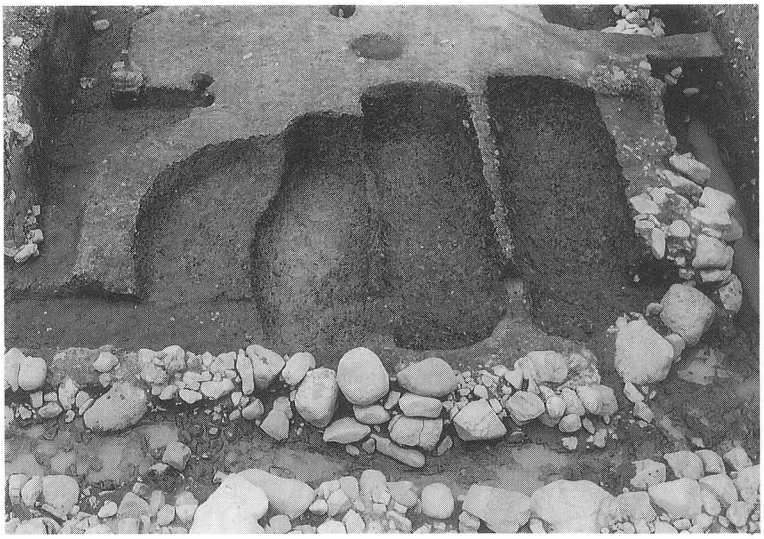


写真22　集石土壙完掘状況（西から）

写真23　作業風景（北西から）

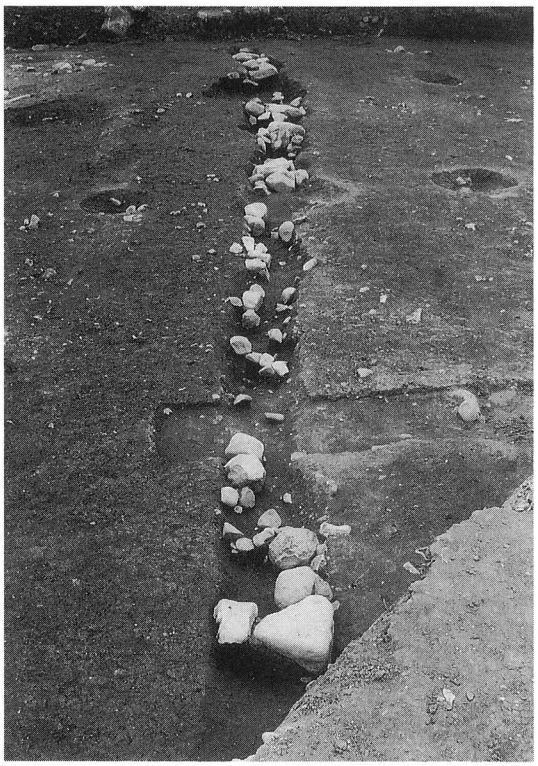


写真24　1号暗渠検出状況（北から）

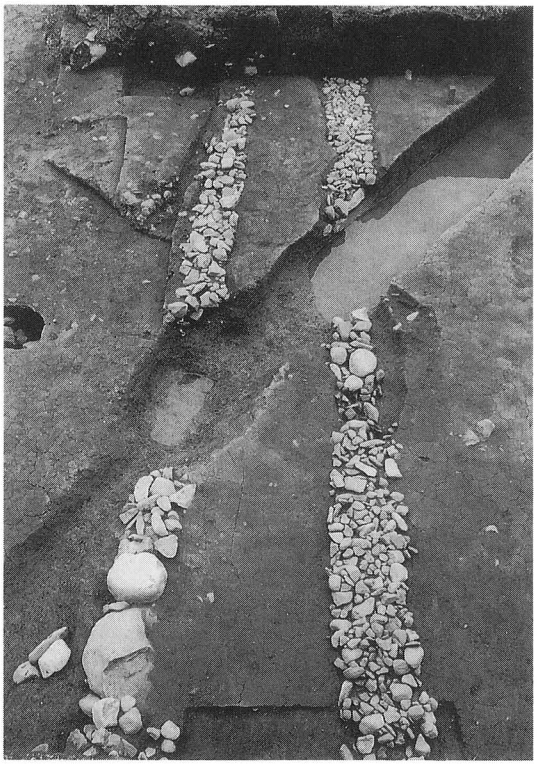


写真25　2号暗渠・3号暗渠検出状況（南から）

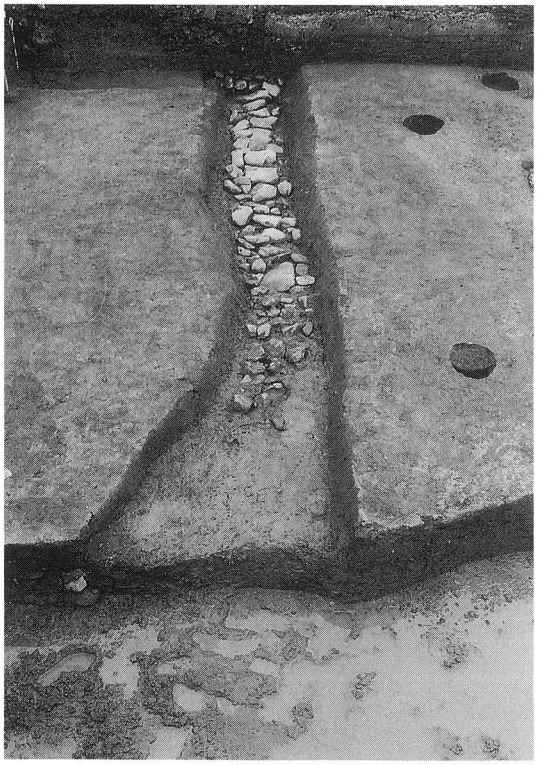


写真26　5号暗渠検出状況（南から）

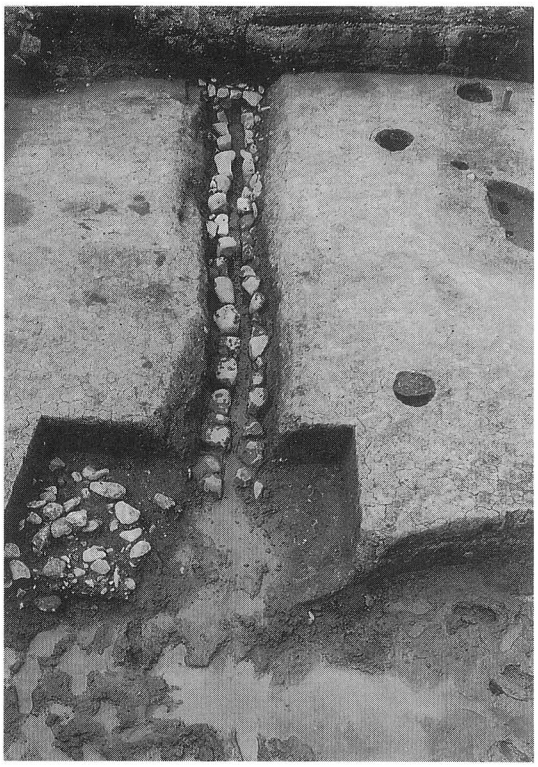


写真27　5号暗渠蓋石除去後（南から）

写真28　4号暗渠検出状況（南から）

写真29　4号暗渠・17号溝完掘状況（南から）

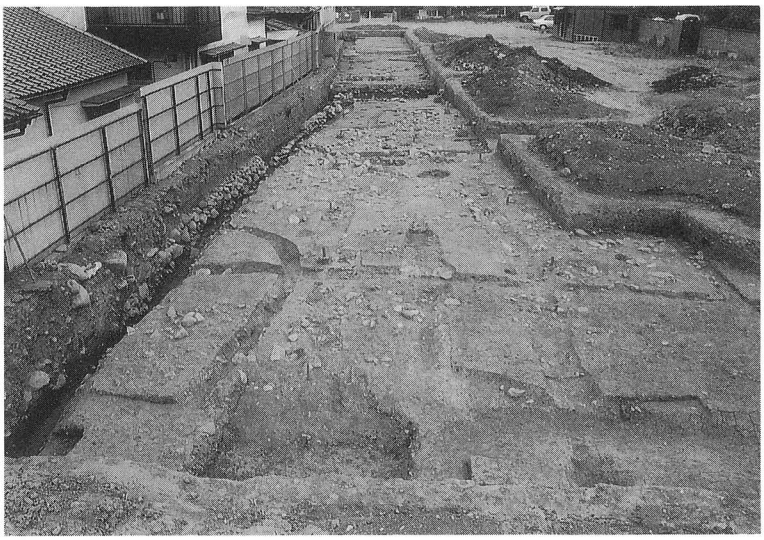


写真30　調査区全景（東から）

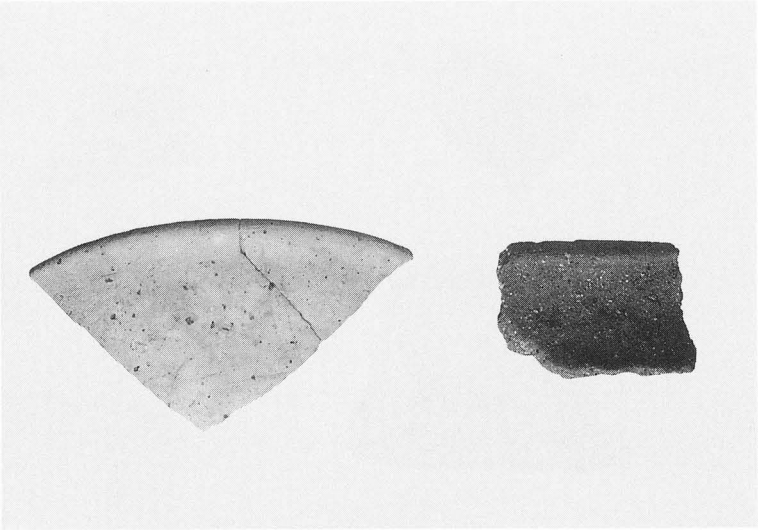


写真31　1号住居出土遺物（1・2）

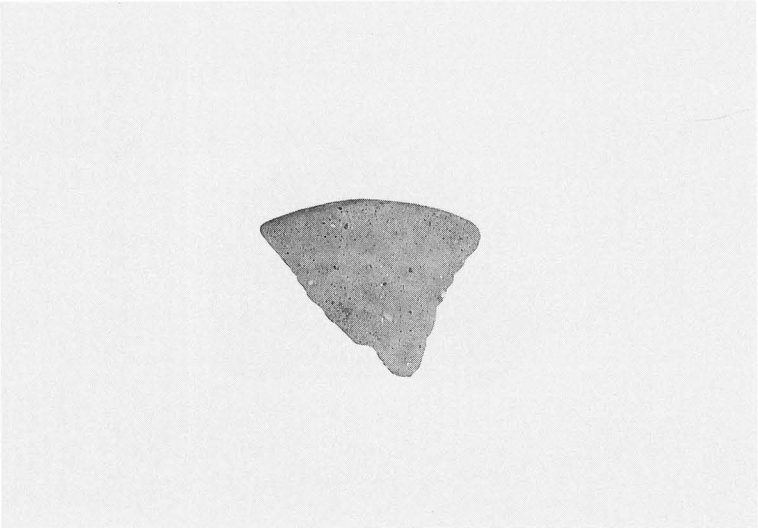


写真32　5号土壙出土遺物（3）

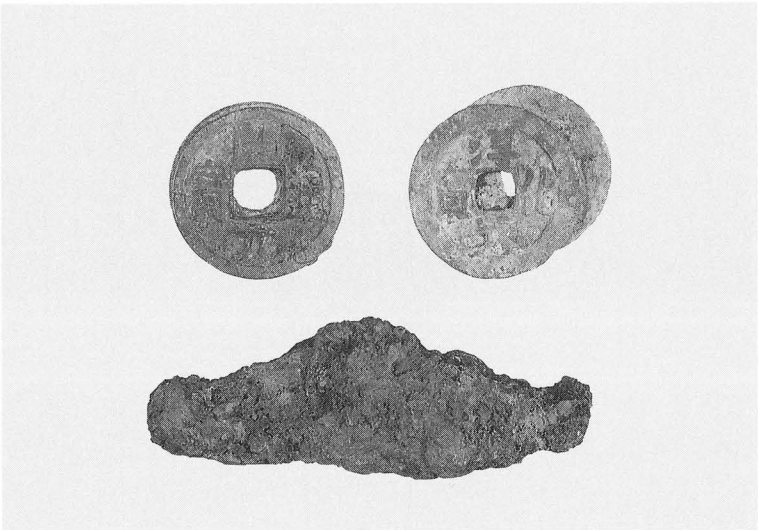


写真33　6号土壙出土遺物（4～6）

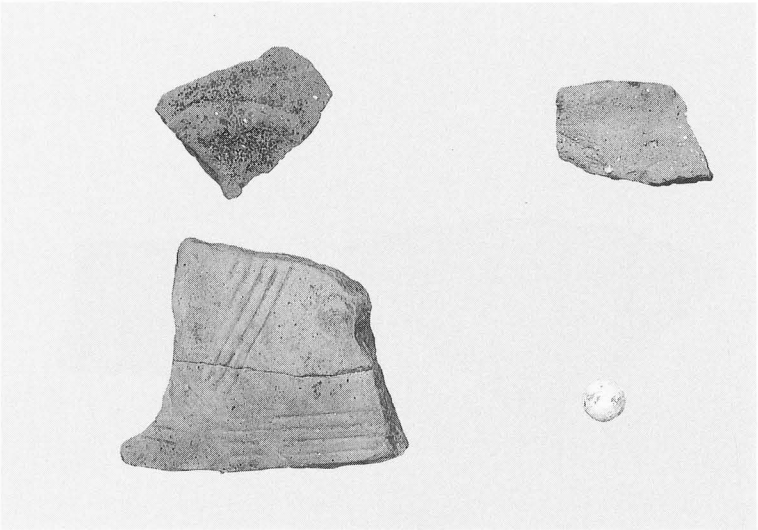


写真34　ピット出土遺物（７～10）

写真35　１号溝出土遺物（11）

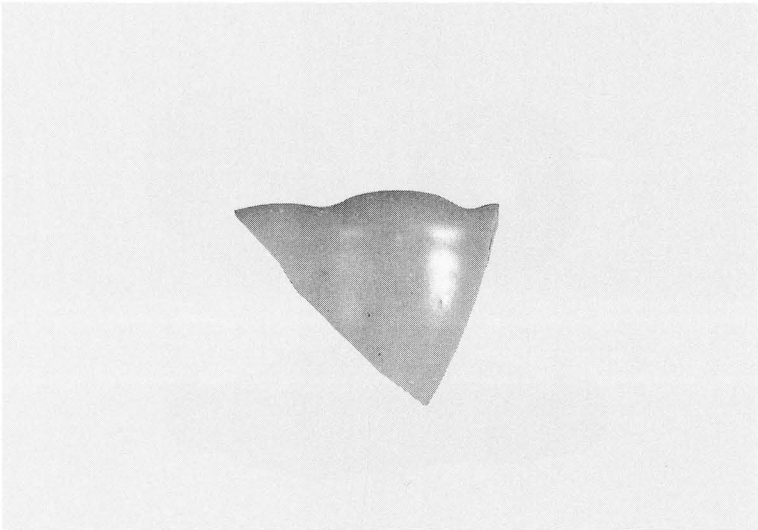


写真36　３号溝出土遺物（12）

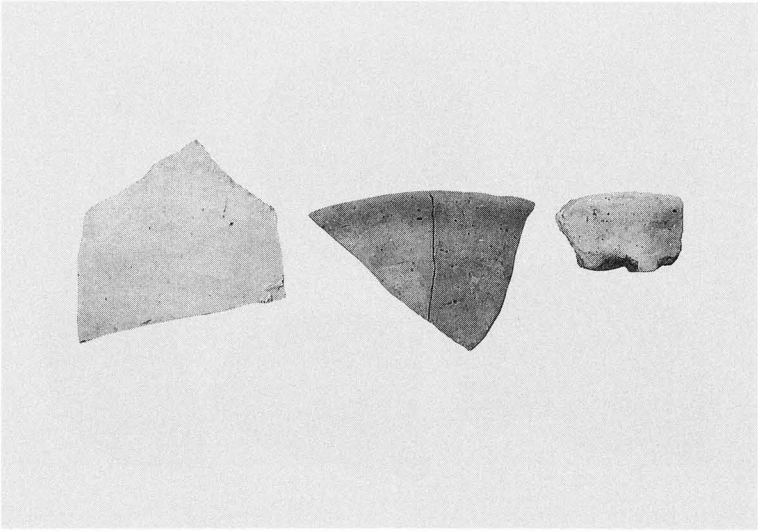


写真37　4号溝出土遺物（13～15）

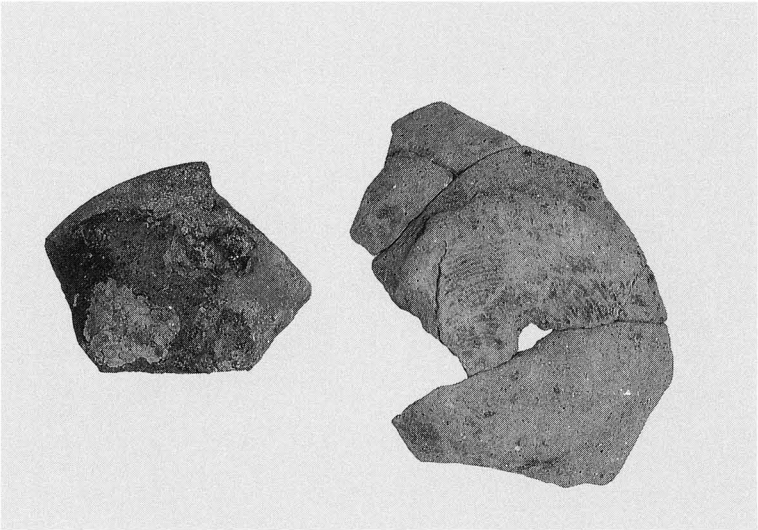


写真38　10号溝出土遺物（16・17）

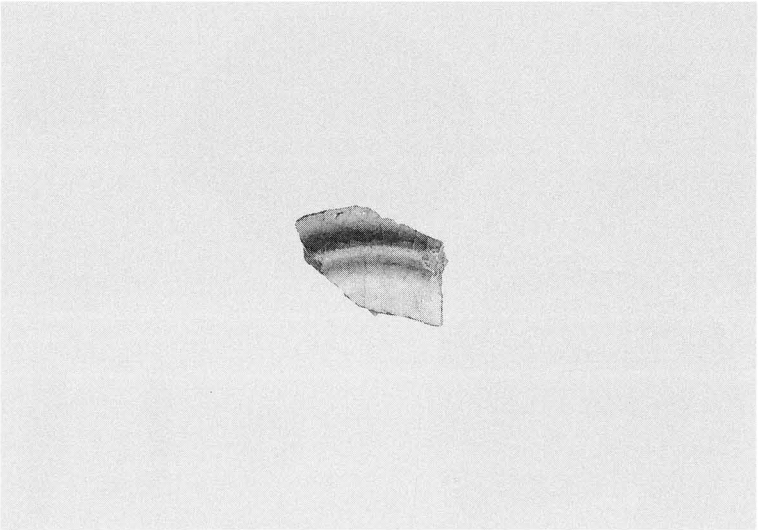


写真39　16号溝出土遺物（36）

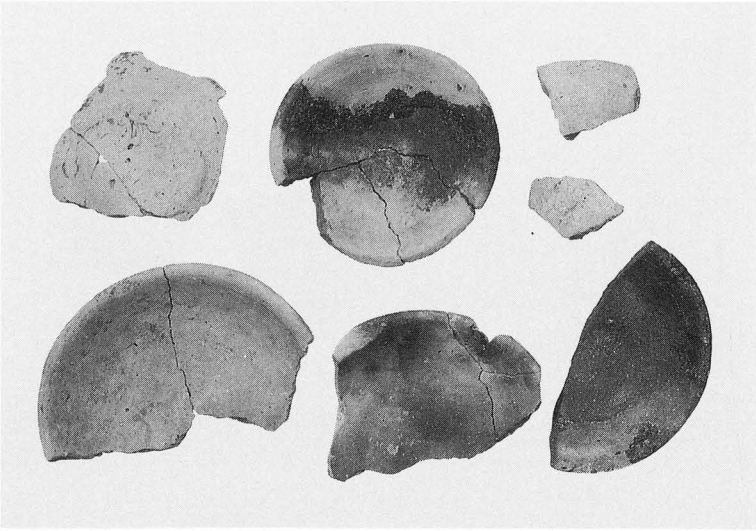


写真40　12号溝出土遺物（18～24）

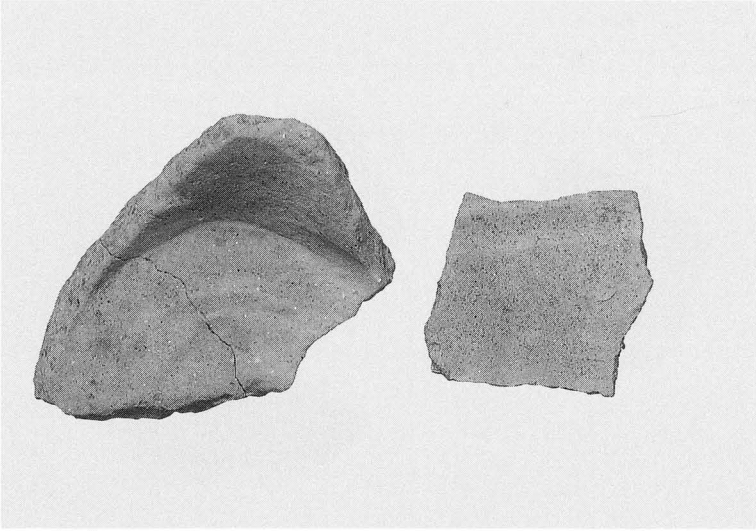


写真41　12号溝出土遺物（25・26）

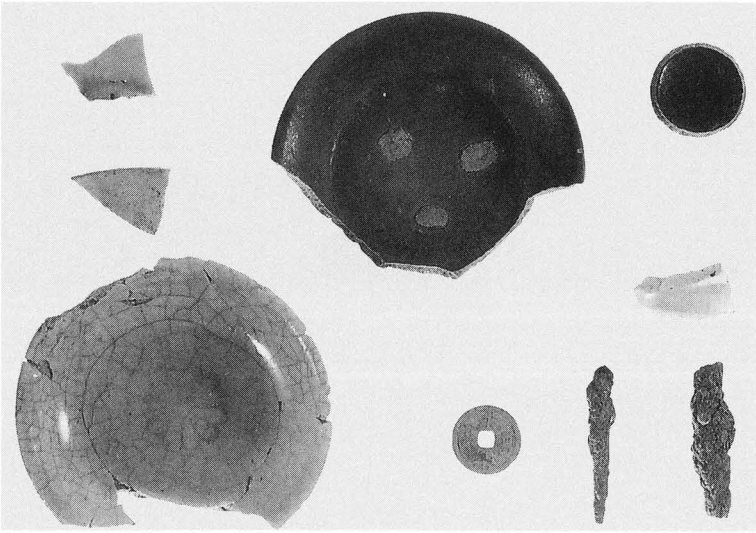


写真42　12号溝出土遺物（27～35）

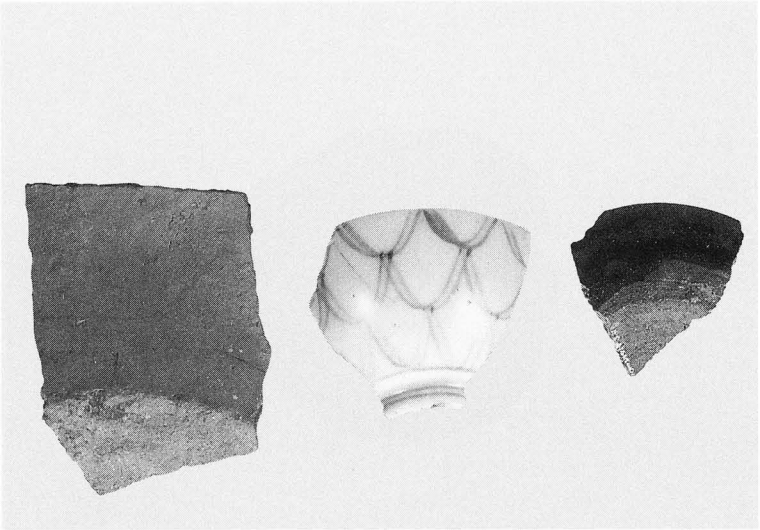


写真43　18号溝出土遺物（37～39）

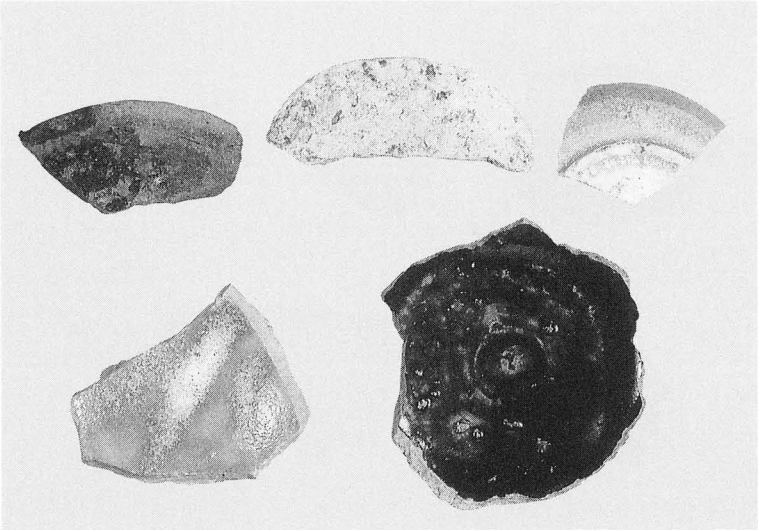


写真44　19号溝出土遺物（40～44）

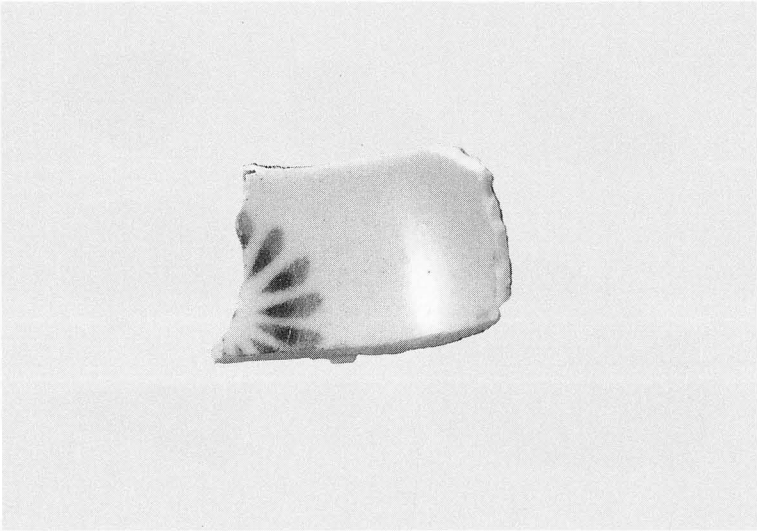


写真45　19号溝出土遺物（45）

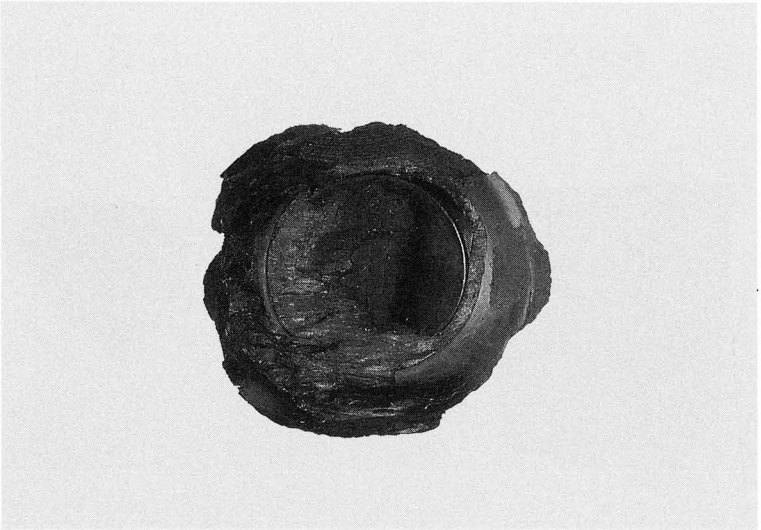


写真46　19号溝出土漆製品（46）

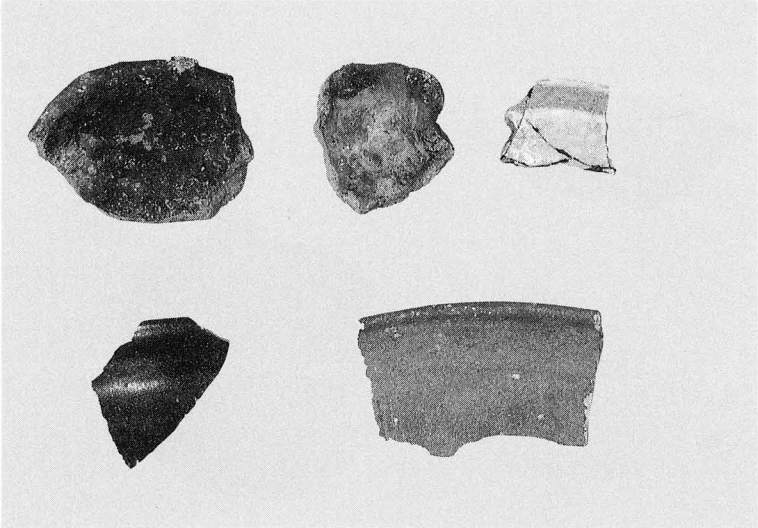


写真47　19号溝下層出土遺物（47～51）

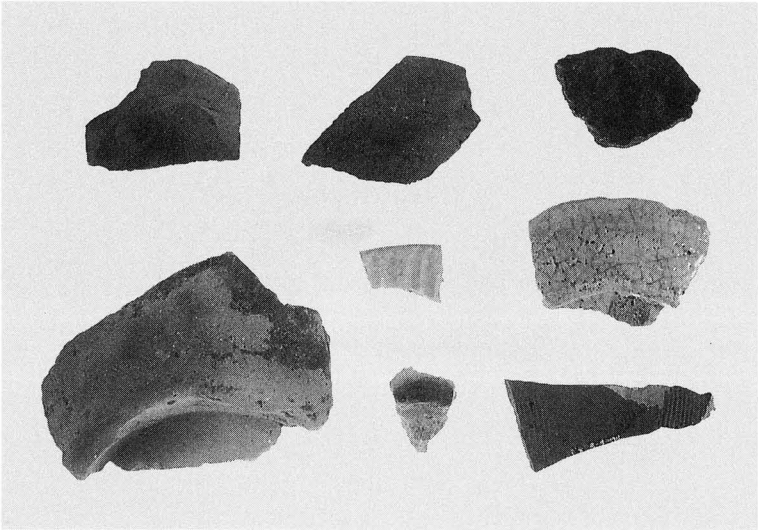


写真48　20号溝出土遺物（52～59）

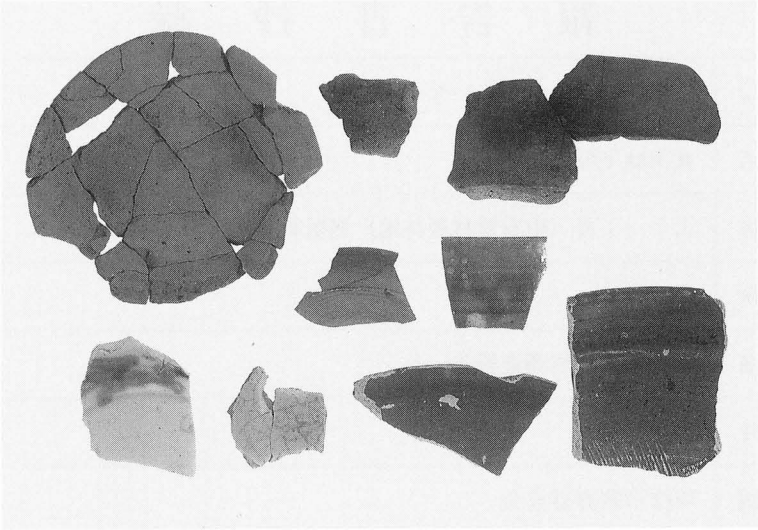


写真49　集石土壙出土遺物（60～68）

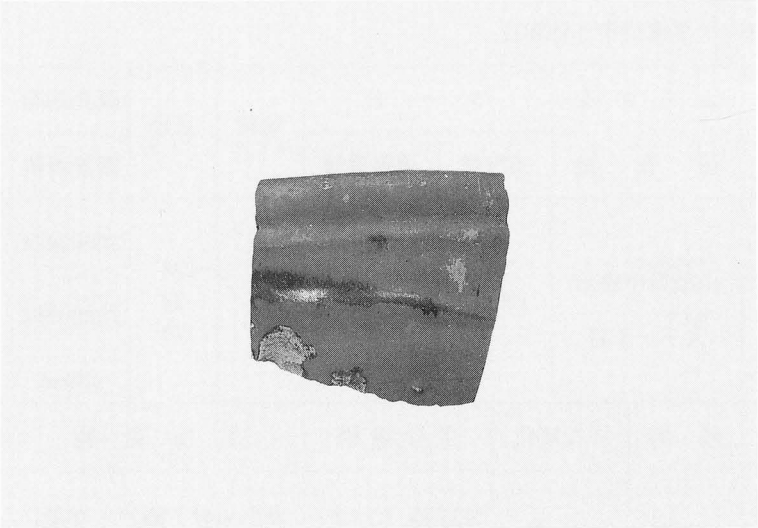


写真50　4号暗渠出土遺物（69）

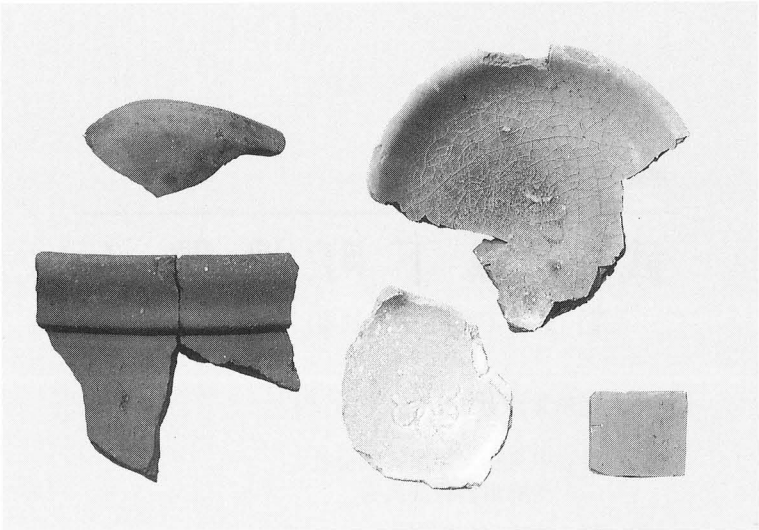


写真51　調査区出土遺物（70～74）

報　告　書　抄　録

ふりがな	たけだじょうかまちいせき
書名	武田城下町遺跡
副書名	大手一丁目（甲府営林署跡地）発掘調査報告書
巻次	I
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	17
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号　電話 055(223)7324
発行年月日	平成13年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 調査面積	調査原因
たけだじょうかまち 武田城下町 いせき 遺跡	やまなしけんこうふし 山梨県甲府市 おおて 大手一丁目	19201		35° 40′ 32″	138° 34′ 79″	20000424 ～ 20000714 430m²	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武田城下町遺跡	城下町	中世	住居跡、ピット、暗渠、土壙、溝	かわらけ、瀬戸・美濃、青磁、染付、焼土塊	

甲府市文化財調査報告17

武田城下町遺跡 I

―大手一丁目（甲府営林署跡地）発掘調査報告書―

平成13年３月30日

発　行　中央都市建設株式会社
　　甲府市教育委員会

印　刷　㈱内田印刷所
　　〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18